第15回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 発表

今年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。よろしくお願いします。

第一五回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二一年七月二五日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。

今年から、「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただくことになりました。特別賞、三田誠広賞、河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人協会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手でこの賞を盛り上げ、育てていっていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切にお願いする次第です。

この授賞式は十月三十日土曜日東京神田「山の上ホテル」での全国同人雑誌協会総会・全国同人雑誌会議にて行われます。協会会員以外の方でも参加できますので、どうぞ御来席ください。

またこの結果及び選評とその動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第15回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞

「破れ蓮（はちす）」（「じゅん文学」104号）
飯田 労

特別賞

「狐火」（「仙台文学」95・96号）
渡辺光昭

三田誠広賞

「夢の岸」（「中津川文芸」復刊5号）
鴨居 諒

河林満賞

「しずり雪」（「飢餓祭」46号）
小網春美

読者賞

「負け犬」（「ふくやま文学」32号）
瀬崎峰永

まほろば賞賞金は、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目日美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「ぺん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。

評価が分かれた

三田誠広

みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学名誉教授

候補作のレベルが高く評価が分かれたため選考は困難を極めた。最終的には順位をつけざるをえなかったが差は僅かだ。票が集まらなかった「負け犬」（瀬崎峰永）は暴行の被害者の少女が自殺に到る話だが、救急センターの報告書から始まって、医師を中心にした三人称の叙述、ソーシャルワーカーのカンファレンスメモと、多彩な文体の断片を重ねて、描かれている事実に客観的な視点をもたせようという試みを評価したい。残念なのは被害者の告白の部分が長すぎて、作品が単調になり、せっかく試みた客観性が崩れてしまったことだ。少女の告白そのものにはそれなりの説得力があるのだが、そこに単純なファーザーコンプレックスという見解を提示する医師を登場させることで、かえって作品を底の浅いものにしている。あるいは思いやりの深いソーシャルワーカーが登場するので、彼女の視点ですべてを描くのも一つの方法だったのではないかと思う。

次の「しずり雪」（小網春美）は商業文芸誌に多い絵空事のような恋愛とは一線を画した、老いた男と中年の女の奇妙で危うい関係を精密に描いた作品で、経営者と従業員という立場の違いや年齢差、さらに死に瀕した病人と介護者という関係を超越した、類例のない確固とした絆が男と女の間に芽生え深まっていくさまが、見事に描かれている。リアリズムに徹した筆致にも好感がもて、重い読後感をもたらす秀作であると思われた。例年のレベルであればこの作品がまほろば賞であってもよかったという気がしたが、昨今の同人誌の充実ぶりを見ると、来年はもっとレベルが上がりそうだという予感がする。

まほろば賞に決まった「破れ蓮」（飯田労）は崩壊しつつある農村を舞台に、嫁姑の問題から老人介護の問題に移行し、さらに認知症の進行から暴力性を帯び、もはや怪物のような存在となった母親の姿が、息詰まるような濃密なリアリズムで描かれる。蓮根を栽培する泥田の中での母殺殺しに到る展開は圧巻で、受賞に相応しい迫力がありテーマの重さがあった。ただこの主人公が蓮根を栽培するほかには労働意欲に乏しく、妻や子に対しても冷淡であることで、読者はシンパシーをもてないのではないかという懸念が残る。とはいえこういう人物はどこにでもいるはずで、作品のリアリティーを削ぐものではなく、受賞に価する作品であることは認めないわけにはいかない。

ここまで述べた三作はリアリズムで描かれているのに対し、「狐火」（渡辺光昭）はリアリズムの領域から一歩踏み出そうという意気込みに充ちた果敢な作品と感じられた。精神に障害を負った伯母のエピソードが中心に置かれている。主人公が生きている日常の世界から見ると、奇行を重ねる伯母の姿は日常性に危機をもたらす異物と感じられる。しかしながら作品の書き手はこの伯母の話を始める前に、主人公の日常である朝のバス停で奇行を重ねる謎の男を描き、主人公が男のあとをつけていく過程を丹念に描く。そのことによって伯母の存在は異物ではなく、むしろ日常性を超えた不思議な領域とつながっていることが示される。さらに作品の最後にもこの謎の男が登場して、主人公と読者をリアリズムを超えた異様な世界にいざなっていく。この作品は「異様を描く」という文学の本来の在り方につながる重要な要素をはらんだ秀作だとぼくは考える。ここには文学の本質に通じる貴重な試みがあり、それが読者を惹きつける独特の魅力になっているのではないだろうか。

こうした素晴らしい作品群の中でも、ぼくがとくに注目したのは「夢の岸」（鴨居諒）という掌編だ。ほかの作品に比べてあまりにも短く印象はうすいのだが、何気ない日常の断片を列ねただけのエッセーのような語り口に、散文詩のように清冽な、一種の名人芸としか言いようのない文体が見てとれる。そこで描かれている日常の断片は、リアルであると同時に不思議な浮遊感を帯びていて、まさにタイトルに示されたような夢幻の世界の入口のような魅力的な気配を漂わせている。

それだけではない。最終的なエンディングの部分に到って文体はさらなる輝きを放ち、そこまでに列ねられた一見バラバラのように見える断片が互いに交錯し、有機的に結びついていく。そのことによってこの作品がただの随想ではなく、作者によって緻密に構築された野心的な文学作品だということが明らかになっていく。しかも作品の冒頭で示された小舟のイメージが最後に再び登場するに及んで、作品は見事な円環を成して終結する。このような秀作がさりげなく置かれている同人誌の世界の奥深さに、改めて感動を覚えずにはいられなかった。

どれも鮮烈な作品

小浜清志

こはま　きよし
1950沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

「負け犬」瀬崎峰永。壮絶な作品である。特に手記の場面は鮮烈である。

白杖の太ったおばあさんに親切心をだして家まで送り届けてから知らない道を歩いた。公園脇にパール色のハイエースが止まっていて運転席から大きくてマッチョな男が降りてきた。スキンヘッドでヤバそうな男だったので私は車とは反対側を歩いた。しかし、男は私に近づいて来るなり、ねえごめんと話しかけてきた。なにがごめんだろうと振り向いた瞬間拳骨で頬を殴られ私は道に倒れる。男はそんな私をハイエースの後部座席まで引きずっていく。私は気が狂ったように大声をあげて助けを求めると、男は私のアゴを拳で殴りごめんと呟く。周りには人がいたはずなのに誰も助けには来なかった。男は車を十分ほど移動させ大音量の音楽をかけたまま後部座席に来るなり平手でなんども顔を殴り制服のスカートをめくってくる。

レイプの描写は幾度も目を背けたくなったが、ただその迫力にねじ伏せられてしまった。迫真の表現は時に戦慄さえ覚え、紡ぎだされる文字に翻弄されつづけた。いたるところにリアリティがありこれは経験者の手記かとさえ思った。人間が泥にまみれ地獄へと落ちていく様をこれほど完璧に描かれると文字は凶器にもなりえるのだと怯えた。最初に読み終えた時、当選作でもいいのではないかと思った。私はこの作品を生涯忘れることはないだろう。

「しずり雪」小網春美。しずり雪という言葉をこの作品で初めて知った。「私」七尾朱里と立花修司の不思議な関係を描いた作品でとても好感を覚えた。

私は立花の経営するラークトラベルでアルバイトとして働き始める。周りは全員大卒であるが私は専門学校卒。しかし、一年のアルバイトから正社員になると私は頭角を現しつねに上位の営業成績を争うようになる。そしてついに社長である立花と対等に渡り合うようになるとプライベートでも付き合いが増えていくが一線を越えることはなかった。それは二十六歳という年の差もあり私の二度の離婚でもあった。二度の離婚をした直後に立花と食事をしたとき、徐々に肥満の度合いを深めていく立花に私が忠告すると、僕が病気になって先がわからないとなったら七尾と結婚すると立花が宣言した。結婚するという言葉があまりにも軽かったが、急に重くなっていく。互いに独身であり年の差があったとしても男と女である。私は逃げ口上として、結婚なんかしなくたって立花さんが病気になったら必ず面倒はみます、立花さんの死に水は私が取ってあげますからと答えてしまった。逃げ口上ではあったが家族のいない立花の面倒は私が見るのだと思った。だから、結婚でなくて、養子だったらなってもいいと伝える。だが、立花は強い口調で養子ではだめなんだと言ったが、口調を和らげるように、七尾に死に水を取ってもらえるとは嬉しいね、そうしたら僕が今住んでいるマンションをあげるよと告げた。そんなやり取りがあってから間もなくして会社の経営が悪化する。二年間低空飛行を続けたのち大手の会社との合併がみのる。社員たちは喜ぶが私は会社を辞める。私は会社を辞めても定期的に立花と連絡をとり合っていたが、ある日マンションに呼び出されて病気のことを知らされ、結婚して金沢で暮らさないかと頼まれる。悩んだあげくに立花の介護をする決心を固めるが、親には言いだしにくい。しかし、金沢行きのいきさつを伝えると、あんなにお世話になった社長の面倒を看る仕事だと割り切ってがんばりなさいと逆に励まされてしまう。死に向かい弱っていく立花との金沢での生活を作者は丁寧に繊細に描いていく。立花の意向を受けて婚姻届けを提出するまでのいきさつも破綻なく表現される。そして、立花の前で私が全裸になった場面は思わず快哉を叫んでいた。男と女の危うい空気をきちんと掬い取り巧みな文字でひろげてくれる作品世界に心が癒された。

「狐火」渡辺光昭。

書き出しから不思議な人物が登場する。決まった曜日と決まった時刻にひとりの男が現れる。通勤者や高校生の列が生まれ始めると、そのタイミングを計ったように毎回思いがけない場所から現れ、列の端から端まで二度行きつ戻りつして、そのなかの一人の傍らにたつ。思いもかけず男に選ばれてしまった当人は、困惑して男を無視するか並ぶ場所を変えたりする。誰に狙いを定めるか、男の根拠は不確かで気紛れにしか見えない。男はその後あらためて最後尾につく。自分の後ろに新たに人が並ぶとさっと身を翻して脇に退き、会釈して場所を譲る。やがてバスがきて行列は次から次へと車内にのみ込まれていくが男は自分の番がやってきても乗ろうとはせず、駆け込みで乗車する人の進路を妨害しないように立ち、慌ただしく乗りこむ一人一人を見送る。その間も、男の口元からは切れ目なくつぶやき

声が漏れ出ている。やがてバスが走り出す後姿を、男は直立不動のまま、敬礼の姿勢を取って見送り続ける。この変わった男とともに本多暁子という伯母の存在がこの作品をより複雑なものにしていく。十五年前の、夏休みに入ってまだ間もない昼下がりに、学生服に身を包み、学生帽を目深にかぶった人が玄関に立っていた。学生帽の庇で顔の半分はかくれていたが白い肌も鮮やかな唇も学生服には違和感があった。「たみおちゃん、ただいま」と主人公直也の父の名を呼んだ。突然背後で悲鳴があがる。母が両手で口を押えたまま棒立ちになっていた。玄関での騒動を聞きつけて妹の梨沙も母の腰にすがり付くつくようにして訪問者を見ている。狼狽する三人の後ろから祖母が現れ訪問者が暁子伯母だと直也がようやく納得する。暁子は波乱な人生の後精神病での入院生活を余儀なくされ、二か月前に大腸がん末期の診断を受け入院した病院が直也の近くだったため直也が緊急連絡先にされていた。一度会ったきりの暁子伯母が危篤になったとの連絡が入る。時計は午後十時を回っている。最終バスは終わっているし、酒を呑んでいるので車は運転できない。降りしきる雪で交通網は混乱しているであろう。結局二時間かけて辿り着いたが叔母はすでに息をひきとっていた。慌ただしい葬儀を終えて久しぶりに仕事に復帰すると決めると、バス停の男の煩わしさが甦ってくる。しかし、男は現れることはなかった。休みの日にかつて男を尾行したことのある道を辿ってみると男の住んでいた家は火災にあったらしく黒ずんだ柱があるだけだった。そして、夢のなかで男の家に火を点けたのが暁子伯母だと男が告げる。そして「キツネビが遠くに見えていても、そんな時には、キツネは見ている人間の隣にいるんだ。」という謎の言葉を残す。

男も暁子伯母も直也の妄想ともとれる。見方を変えてもそれぞれに見えるのがこの作品の奥の深さであろう。

「夢の岸」鴨居　諒

池の端に小さな船が引き揚げられている。瀬尾が散歩するときには必ず通る場所で、家から歩いて十五分ほどの場所にある。はじめはよくある風景だと思っていたが、よく考えてみたら疑問が次々と湧いてくる。そんなに大きくもない池に船を浮かべても景観がいいとは言えない。ボート乗り場にあるような二人乗りの船で魚釣りをするのも不釣り合いである。少し長めの棹さえあれば池のどこにでも釣り糸は垂らせる。そこで釣りをしている人をみたこともないし、魚がいると聞いたこともない。瀬尾はその夜家族と夕食をともにしながらボートのことを考えていた。あの船は夜みんなが寝静まった頃何処かへ出掛けているに違いない。そして朝になるとまるで何事もなかったように、そしらぬ顔をして全く同じ場所に戻っている。そんな想像をした。という妄想のような話からはじまり、次は娘の人形が消えるというエピソードにつなげられる。文化祭の演劇で人形が小道具として使われることになる。娘が小さい時に買った人形であるがそれは瀬尾にも記憶があった。そして、次の日曜は一家総出で大捜索を行う。家の中のありとあらゆるところ、押し入れの奥、倉庫の中に収めているものを出してまで捜すことになった。しかし、何処にも見あたらない。

「静香があまり放っておくものだからきっとこの家に嫌気がさして出ていってしまったんだよ」

まるで人形に意志があるような最後の言葉が夢の岸と繋がっている。次の竹藪でも同じように夢という曖昧模糊とした概念に向かおうとする。それは家の庭に植えてある花にも現れる。「まるで花達が瀬尾のした何かに腹を立て、しめしあわせて花を咲かせずにしているように思えて仕方がなかった。」

そして、花の咲かない椿の木を切ろうかと庭師と話した翌年にその椿が一遍にたくさんの花を咲かせるようになった。という友人の話に発展していく。まさしく夢の岸辺にたどりつく人間の想像は物にも植物にもあるだろう。

「破れ蓮」飯田　労。

当選作になったこの作品は何といっても緻密さと勢いにあふれている。レンコンを細々と栽培しながらバアバの年金をあてにしながら生きている私は、かつて勤めていた鉄工所にときどき部品を届けにきた工具店の娘と所帯を持った。子も生まれ親と同居するようになってから妻との距離がひろがっていく。バアバと妻のあいだでうろうろするしかなかった。父が死んでからバアバが豹変する。葬儀から戻ってきた夜からバアバは父の座っていた場所を占領し周りには嫁の悪口を吐き散らしていた。妻から別居を切り出されたがそれを実行するには金銭的にも余裕がなかった。ある晩からバアバの奇行が始まる。押し入れにあった古い枕を女の子の死体だと喚いているのである。その後バアバは夜の一時頃になると同じような騒ぎを起こすようになる。妻は寝不足になりパートへの出勤途中で追突事故を起こしてしまう。

それからしばらくして妻は家を出て行く。

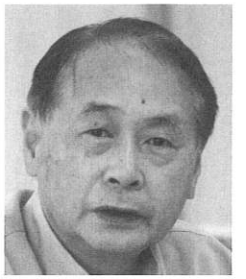
痴呆の進んできたバアバの奇行を食い止めるため外側から鍵をかけて出掛けるようにしていたが、ある日玄関の外鍵を忘れて外出してしまった。農協の人と立ち話をしているときバアバの姿を発見する。家では前屈みで歩幅も小さく、時には壁伝いで歩くバアバがまるで鎖を解き放された犬のように、大手を振って歩いている。いかにも楽しさを感じている大きな腕の振り、目標があたかも定まっているかのようなしっかりとした足取り。バアバを追いかけてい

くが私の息はすでにあがっていた。田のひろがる所に立った。バアバは遠い先を相変わらず歩き続けている。家での様子は仮の姿だったのだろうか。私は何度も立ち止まり深く息を吸って走り出した。しかし、バアバはあろうことか植えたばかりの田へ飛び込んだのである。逆にたじろいだのは私の方だった。まだ根もはってない苗は踏まれればすぐに浮いてしまう。急いで田から引き上げなければならない。バアバは容赦なく田を横切る。しかたなく私も田に入りバアバを捕獲する。二人はずぶ濡れ泥まみれになる。バアバを背負い家に戻る。私はやるせなさを抱きながら、バアバが踏みつぶした苗の事を思うと一層足取りが重くなった。

湯船に湯をはりながら、タイルの床に泥が落ちるのも構わずバアバの衣服を手荒くはぎ取っていく。そこから、私がバアバを溺死させるまでの描写が素晴らしい。遊びにも似た湯船でのやりとりが死に繋がっていくのは自然な出来事に見えた。実際に経験をしたことがあるかどうかは別としても作品から伝わってくる迫真性は読み手を惹きつけて放さなかった。一つだけ残念に思ったのは冒頭にバアバの死を持ってきたことである。

迫力ある問題作

五十嵐勉



いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

早稲田大学文学部文芸科卒

79「流謫の島」群像新人長編小説賞

84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長

主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT　プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」

第一五回を迎えたまほろば賞は、候補優秀作が五篇で普段より一つ少なかったが、問題作が集まった。題材が衝撃的で、負の領域に引き込まれる迫力はこれまでで最も大きかった。特に「負け犬」、「狐火」、「破れ蓮」は、それぞれ犯罪の領域にまで深く踏み込むことによって日常を暴いていて、その切開力は鋭く、否応なく内臓を見せつけられる迫真性は、スリリングで、文学の一つの領域をあらためて開示してくれるものだった。ただ、迫力は強いものの、読み終わって読後感がいいかと言うと、何となく後味の悪いものが残る。それがやや作品を親しくさせないもどかしさをも内包していた。またこういう領域の作品は、一般的に

賞を取りにくい。賞を取る場合は、否応なく認めさせるだけの強烈な振り切りを示す場合だろう。負の領域を示しての優れた作品はドストエフスキーの「悪霊」やフォークナーの「サンクチュアリ」などがあり、佐木隆三の「復讐するは我にあり」もそれに近く、その徹底した「悪」の露呈には圧倒され、完璧に打ちのめされるが、そこまではなかなか到達しにくい。中途半端さが若干救いにもなり、それがまた逆に後味の悪さともなって残るのかもしれない。

今回はおそらく評価がバラバラで、どの作品がどんな支持を受けるか、予測がつかなかった。どういう結果になるか、危うい気持ちで選考会に臨んだ。果たして蓋を開けてみると、まったくその通りになった。これほど割れた選考会は初めてだった。しかしこういう選考会があってもいい。二回前の選考会は満場一致で決まった。その逆があってもおかしくない。

瀬崎峰永氏の「負け犬」は、強姦された少女の手記が主旋律になっている。方法は新鮮で、突き放した冷たい叙述がそのリアリティを引き立たせていて、主治医師や看護師の態度が少女の輪郭を際立たせている。医師には医師の世界があり、看護師には看護師の世界があるという割られた存在は、真に交わることなく、事件の結末を招いていく。描写は鋭く、冷たさが光を帯びている。学校に行かなくなり、転落の道を辿って自分の右腕に「負け犬」と刺青するシーンはこの筆者でなければ書けない痛烈なものがある。またそれぞれの部分や領域を丹念に調べてその上で書いている生々しい筆致がある。本来このリアリティだけでも賞に値すると思われるが、今回は鳥への個人の趣味に埋没する医師の顔や看護師の関わりの遠さが間接的に少女を自死に追い込んでいる冷淡さが逆に足を引っ張った。父親へのコンプレックスが示され、「負け犬」という視線で見下す父親が会いに来ると言うことを聞いて自死するその理由の、深い位置での事情が示されていないところにやや曖昧な不足感が残る。これらが真に一つの方向を向いて焦点を示されれば、より完成度は高まっただろう。力量はあるので、また気を取り直して意欲作に挑戦してほしい。

「まほろば賞」となった飯田労氏の「破れ蓮」は、現代版「母殺し」の小説である。筆者の確かな筆致によって、介護を受ける認知症の母親を殺さざるをえなくなる過程がしっかり描かれている。その流れに淀みはない。妻の離反、彷徨、便の処理、叫びと、殺しへ追い詰められていく悲劇性は確かに収斂している。これはまた、この過程で不思議な普遍的共感を呼び寄せてくる。それは現在の日本において、同じような立場に立たされ、殺意と忍耐と愛情の間を揺れ動いている人たちがたくさんいることの共鳴である。それは大きなものとして鳴り響きつつ、もう一つ躊躇いのうちに別な眼差しをも投げてくる。自分の母親を「バアバ」と簡

単に呼んでしまうその命の関連の希薄さ、母親の頭を湯船に押さえ込む自分の手の力の虐待性――それらはある一線を超えてしまう罪悪の欠如を伴って、親子の根本を腐食させる。主人公は最後に死んだ母親に誘われるように蓮池の泥沼に吸い込まれるのだが、最も重要な親子の間の尊厳に、迫り切っていない恨みが残る。より広がりを感じさせる側面と、何か重要なものが置き去りにされている不足感とが、背反しているところにこの作品の特徴がある。

特別賞となった渡辺光昭氏の「狐火」は、バス停で待つ人に順番を譲っていく奇行の持ち主の人物像が妙に生々しく、不思議な存在感を持っていて、つい引き込まれて読んでしまう。また精神病院で亡くなる伯母の「暁子」の存在も魅力があり、学生服を来て家に勤め先から逃れてくる狂気の端緒も鮮烈に残る。風変わりと狂気の系譜がここには確かに流れており、それが生きる過程でつねに足元に覗いているその危うさも、主人公を通して迫ってくる。最後は狐火の炎の舞に呑み込まれていくのだが、最後まで狂気に逃れていった伯母と火事でわからなくなった奇行の男の像が焼き付いて離れない強い残像を持った作品である。

後味の良さは鴨居諒氏の「夢の岸」が一番で、夢と現実のあわいが見事に描かれていて、生命というつねに揺れ動いている表象の浮薄性と流動性が浮かび上がってくる。竹藪も台風も草も木も、みな命の表象としてうねり動いているその万象の命の模様が感じられるところに、この作品の妙味がある。夢のつながりは生命のつながりとして巡り動いている鼓動が聞こえてくる。この作品は特に三田誠広氏が高く評価し、「三田誠広賞」を授与された。三田氏がここまで支持したのは、初めてである。祝意を表したい。

小網春美氏の「しずり雪」は元会社の上司の癌末期の看取りをする女性のストーリーで、随所に見られる確かな叙述が経験によって磨かれた光を放っている点に魅力があった。男女に存在感がある。年齢差や財産の引き継ぎにややもたついた筆跡も感じられたが、「しずり雪」という魅力ある言葉を選ぶ感覚や、旅行会社の世界を的確に描く実社会の重みを備えている点でも、評価が高かった。特に中上紀氏と小浜清志氏がこの作品を買って、河林賞に推挙した。

今回から、「まほろば賞」は、徳島県三好市の「富士正晴同人雑誌賞」を引き継ぐ形で始まった全国同人雑誌賞と並ぶ大きな賞となり、いっそう重みが増したように思う。実質的に「まほろば賞」のこれらの作品は昨今の芥川賞作品よりも優れている。インパクトもある。今夏の芥川賞二作品も読んでみたが、ぬるくてボケている。同人雑誌に拠って創作に励む作家は、そんな作品を踏み倒し、「自分が日本文学の流れを変える」くらいの意欲を持って、新たな力作を発表していってほしい。

現実から逃げてみた先

中上 紀

なかがみ のり
1971 東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99「イラワジの赤い花 ミャンマーの旅」（集英社）を上梓
同年「彼女のプレンカ」（集英社）
ですばる文学賞受賞
「悪霊」（毎日新聞社）「いつか物語になるまで」（晶文社）「夢の船旅―父中上健次と熊野―」（河出書房新社）「アジア熱」（大田出版）「シャーマンが歌う夜」「水の宴」（集英社）「海の宮」（新潮社）「熊野物語」（平凡社）「天狗の回路」（筑摩書房）など著作多数

今年もまほろば賞の選考に参加させていただいた。去年に引き続きコロナ禍での開催であったから、人恋しさがひときわ募り、会場で選考委員の三田誠広、小浜清志、五十嵐勉各氏にお目にかかるのが楽しみでならなかった。この日に語り合った小説五作品も、例年以上にレベルが高く、素晴らしいの一言だった。疫病という怪物は、もはや日常生活に当たり前のように横たわるようになったが、文学だけは脅かすことはない。まざまざと感じた選考会だった。

さて、そうは言いつつも、選考そのものはかなり難航した。なぜなら、五作品それぞれが、まったく異なる切実さのある、重々しいテーマを抱いているのである。私自身、最後の最後まで悩み、推すべき作品を決められないまま、選考会に臨むしかなかったくらいだ。かくしてお聞かせいただいた各先生方のお話は、すべて納得が行き、かつ勉強になるものばかりであったが、同時に何れの作品にも受賞の可能性があるということを逆にはっきりと突き付けられ、結果さらに決断を迷うことになった。投票は一回目では決まらず、二回目でようやく決定という経緯であった。

以下、私の感じたことを順不同に書かせていただく。

小網春美氏の「しずり雪」は、主人公である七尾という女性の繊細な心情に心を重ねながら読んだ。七尾が最後まで看取る決心をした年の離れた男性立花は、会社の社長だけれども、同時に親のようでもあり、恋人のようでもある友人だ。特定の呼び方で呼ぶことが出来ない、この微妙な関係性のあわいに引き込まれた。人間関係は、年齢を重ねるにつれて、はっきりと名前を付けることの出来ないあいまいなものが増えていく。七尾自身も、二度の結婚に失敗し、子どもも二人いるいい年なのである。立花との生活はほとんど介護である。やがて男は結婚を求め、七尾は受け入れるが、彼には財産があった。何の計算もないなどと言ったら嘘になるが、同時に、あえて相続を了承することで立花を後ろめたい気持ちにさせないという七尾の優しさが胸を打つ。金沢の風景、そしてはじめて目にした雪の形の一つ「し

ずり雪」の描写に引き込まれた。

瀬崎峰永氏の「負け犬」では、まず病院のスタッフや患者をいろいろな鳥に例えるのが好きな個性の強い医者に目を奪われる。入院している少女が記した手記に書かれた生い立ちから性暴力を受け自殺未遂に至るまでの経緯は生々しい。幼い妹を失ったという過去や、父親と一緒に入浴した時にされた行為など、気になる部分を孕んだ父親との関係性が、綾乃の自殺で一方的な謎に書き換えられて読者に突き付けられる。途切れてしまったのは、自らの手で自由を手に入れた命が、どこかへ飛んで行ってしまったからなのだろうか。あるいは、医者の言葉のように彼女が鳥のようなのだとしたら、これは鳥葬か。

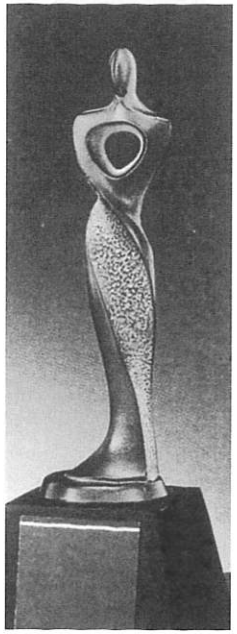
「狐火」は渡辺光昭氏の作品だ。バス停で出会った奇妙な男を追いかけていくことでふっと日常からそれた別の次元のような世界に入り込むという経緯が面白い。その男が醸し出す非日常性から、主人公は異質な存在であった自らの叔母を思い出す。出てくる人物たちみんなが狂気を孕んでいるようなエンディングには圧倒された。もちろん、一番は主人公であろう。男の家が火事で消滅し、住人が行方不明と聞いて、直也は過去の火事とそれを重ね合わせるのだが、直也が忘れたいと思っていたことを、幻想の中の叔母に告げられ、破滅していく経緯には圧倒される。

鴨居諒氏の「夢の岸」は、語り手である瀬尾の幻想が日常をじわりじわりと浸食していく形で進んでいく。大きな事件が起こるというのではないが、池に浮かんだボートであったり、庭で育てている芍薬であったり、紛失してしまった娘の人形であったりといったモチーフが、コラージュのように独特の世界を作り出している短編だ。ここにも微かなズレのようなもの感じた。厳密に言えば、夢と日常の境界を感じた。その夢の中で主人公は気付いたら「みんなが寝静まったころ何処かへ出かけ」て、夜には「その場所に戻っている」というボートに乗る。そしてたくさんの記憶の断片が現実の声のように主人公の前に立ち現れてくる。

飯田労氏の「破れ蓮」の主人公「私」は、物語の最後で蓮田に沈めた母親の胎内に還っていく。途中から、読み手が先を想像できてしまう展開ではあったが、しかしながら、補って余りあるほどの筆の力と、目をそむけたくなるほどの生への執着があった。介護と一言で言い表すにはあまりにも重い問題の中で、夫の妻は苦しみぬいた末に逃げ出した。残された認知症の母親を前に追い詰められていく「私」は、他人ごとではない。ラストシーンで、蓮の田から抜けることが出来ないのは、主人公の罪悪感の回収だろうか。レンコンの収穫の様子の描写を女体の愛撫に例えたのが斬新で、目がくぎ付けになった。

現実から逃げ出した先を覗き見るように読み終えた五作だった。

第15回まほろば賞選考会風景　2021.7.25 大田区民プラザ会議室で



河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の一時中断以後まほろば賞のなかに移されることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金十万円が授与されます。（二〇二一年改訂）

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮

まほろば賞
「破れ蓮」
飯田　労

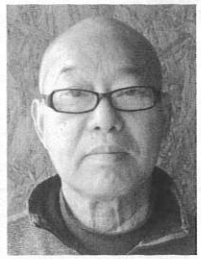
まほろば賞　受賞の言葉　飯田　労

現在七十二才の私は妻と共に九十三才の母の介護をしています。同時に通所介護の送迎運転手もやっています。仕事としての介護の私は「寛容と忍耐」という言葉を心に持ちます。それが親と子となると血の濃さゆえか感情の乱れ（疲労・絶望・暴力・殺意）が生じます。あとは行動に移すか、とどまるか。

何時、作中の主人公と作者の私が入れ替わるかも知れない、といった懸念を抱きながら、私はこの作品を書きました。

今迄良くして頂いた皆様の顔が浮かびます。

ありがとうございました。



飯田　労　　いいだ　ろう

1949　金沢生まれ
本名　飯田誠治
同人誌「渤海」「彩雲」を経て
現在「じゅん文学」同人
金沢在住

まほろば賞は、読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は寄付金合計金額は49000円となりました。これを得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。全国同人雑誌振興会

特別賞
「狐火」
渡辺光昭

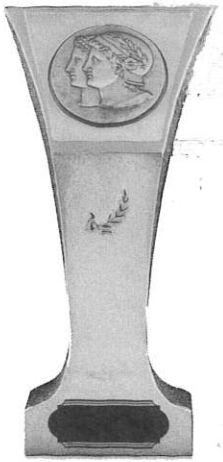
特別賞　受賞の言葉　渡辺光昭

この度は、全国同人雑誌特別賞をいただき、ありがとうございました。同人誌「仙台文学」に参加して、二十数作を発表してきましたが、どれも自己満足の域を抜け出せませんでした。いったい今の自分の実力はどの辺りにあるのか分からず、手探りの状態でした。この度、願ってもない評価をいただき、自分のこれからの歩むべき方向性がより確かなものになりました。まだまだ未熟なところが多く、満足のいく作品に到達することは至難の業ですが、さらなる高みを目指して一歩一歩努力を積み重ねていく所存です。

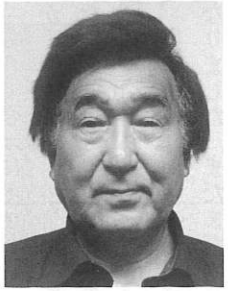
ありがとうございました。

渡辺光昭　　わたなべ　みつあき

1949　宮城県生まれ
宮城教育大学教育学部卒業
東北学院榴ケ岡高等学校国語教諭
「仙台文学」同人
宮城県芸術協会会員
著書『いつか水色の橋を渡って』（近代文芸社）
『起こすか？　戻すか？』（文芸社）
『停留所』（編集工房）

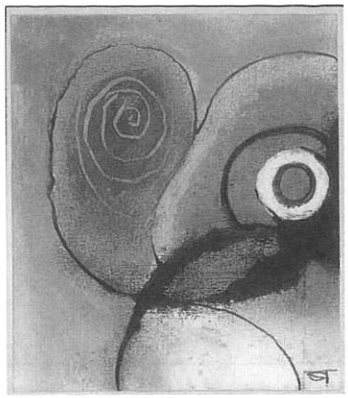


三田誠広賞
「夢の岸」
鴨居　諒



鴨居　諒　　かもい　りょう

1949年生まれ
同人誌「中津川文芸」主宰
短歌誌「彩雲」代表
歌集「アルカディアの碧空」「冬陽坂」「山峡―田中冷灰子全歌集」「風をかたちに」随筆集「風花」
画集「時空万華鏡」
ギャラリー「詩と美術館」経営（現在休業中）



「ヒエロニムスの卵」

三田誠広賞　受賞の言葉　鴨居　諒

候補作に入れてもらっただけでも光栄に思っていたところ、思いがけずこのような賞をいただいてたいへん嬉しく思っています。しかも三田誠広さんにこれほど高い評価をしていただこうとは想像もしていませんでした。

昔は書くときに変な気負いのようなものがあったのですが、今はどんなささやかなテーマ、モチーフでもできるだけ丁寧にすくいあげて、言葉にしていこうという、書くと言うことに対しての以前とは少し異なる、自然な心持ちがあります。そんな姿勢もよかったのかもしれません。ありがとうございました。

河林満賞
「しずり雪」
小網春美

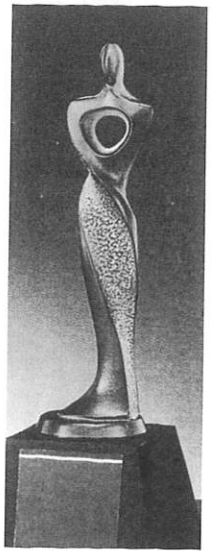
小網春美　　こあみ　はるみ

1947年生まれ
金沢市在住
共立女子大学文芸学部卒業
高校非常勤講師として30年間勤務
同人誌「北陸文学」などを経て、2019年より「飢餓祭」同人となり、現在に至る

河林満賞　受賞の言葉　小網春美

多分年のせいだと思うが、最近の私の小説は「しずり雪」をはじめとして、死を扱ったものが多い。小説においても、その死に深みを持たせるには、生をしっかり描ききらなければならない。振り返って自分自身を見つめてみると、最期に、生をしっかり生ききったと言えるのかどうか。それ次第で死が違った色合いを見せる。書くことを生きがいとしてきた私にとって、河林満賞の受賞は、生きてきた一つの証となりそうだ。

選考委員の皆様に心からお礼を申し上げます。



※まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。皆様の御支援・御協力をお願い申し上げます。

読者賞「負け犬」

読者賞　受賞の言葉　瀬崎峰永

「負け犬」を書きながら、私を突き動かしていたのは怒りの感情でした。性犯罪被害のなかでも家族など周囲の無理解が被害者をさらに追い詰める、いわゆる「セカンドレイプ」の問題に焦点を当てた短編で、一人でも多くの人に読んでほしいと念じながら七転八倒して書き上げました。

このたび思いがけず「文芸思潮」誌上に掲載していただいたおかげで「ふくやま文学」の読者ではない方々にも本作品を読んでいただく機会を得られましたこと感謝しております。貴誌面をとおしてお一人でも多くの方々に本作品をお届けできれば幸いです。

瀬崎峰永

せざき　ほうえい

1968広島県生まれ

中京大学文学部国文科卒業

卒業論文は金子光晴詩集『人間の悲劇』論

97「ふくやま文学」参加

2004年「アビよかえれ」で第36回中国短編文学賞一席受賞

20年「カラスどんぶり」で第50回九州芸術祭文学賞佳作入選

第15回 まほろば賞　読者賞　投票集計

作品名 / 投票者	負け犬	しずり雪	狐火	夢の岸	破れ蓮
木内是壽					30
今田真理子	6	10	10	10	10
山田真己乃		10			
渡辺恵理	15		20		
西田宏明	50				
渡辺正樹	40			10	
夏目由美			20		
外山寛子			30		
山口映子				20	
渡辺　聡	50				
志村　譲	18				
寒河江仁	31				
弓田　肇	50				
山本雅治	20				
木村弥一	30				
計	310	20	80	40	40

●読者賞への御投票と賞金をお送り下さり、まことにありがとうございました。読者賞は右のような結果となりましたので、ここに詳細をご報告させていただきます。

各作品寸評

●「しずり雪」は題材が良いと思いました。今回、どの作品も素晴らしく、実力が伯仲しているように思います。文章だけをとって見れば「夢の岸」の方が上かとは思いました。（山田真己乃）

●「破れ蓮」は、圧巻。現代の「楢山節考」である。現代の真の問題がここにある。（木内是壽）

●どれもみんなよかった。「負け犬」は女性にとっては、ちょっと引くところがある。（今田真理子）

●「夢の岸」は、あちらの世界とこちらの世界とを繋ぐ不思議な領域を鮮やかに示してくれている。ほんとうにこんな世界がありそう。魅力がある。極上のワインの味わい。（山口映子）

●「負け犬」はすごい作品。これがどうして「まほろば賞」にならなかったのか、不思議でならない。このインパクトが一番強かった。現実を直視した冷め切った描写は、この作者でなければ書けないものだ。今、こんな作家はいない。これからもこの作家には注目したい。次にどんなものが出てくるか大いに期待している。（弓田　肇）

仙台文学 95・96号

狐火

渡辺光昭

一

城下町の風情が息づく商店街の一角に、路線バスの停留所がある。屋根もない吹きさらしの案内板の前に、決まった曜日の決まった時刻に、一人の男が姿を現す。週に二度、火曜日と木曜日の朝、七時四十三分発の路線バスを待つ通勤者や高校生の列が生まれ始めると、そのタイミングを計ったように、時には仕舞屋（しもたや）と総菜屋の間の路地裏から、またある時には、コインパーキングの奥のなまこ壁の土蔵の裏から、上体をそらせ気味にして、肩をゆすりながら忙しく歩いて来る。なぜ火曜と木曜の二度なのか、なぜ歩く道順が決まっていないのか、行列に並ぶ本多直也（なおや）は奇異の感を抱くが、半月経った今も謎のままである。

男は、濃紺の背広上下にノーネクタイで、赤いナップザックを背負っている。サラリーマン風に見えなくもないが、背広やワイシャツはしわくちゃのままで、いつ洗濯してアイロンがけをしたのか定かでない。年の頃は四十代後半あたりだろうか。中肉中背の体つきで、ひげは濃く、日焼けのためなのか、生来の肌地なのか、顔も首筋も浅黒い。くせ毛の髪のかかる額は狭く、濃い眉の下のどんぐり眼は、まだ稚気の残る無邪気な光をたたえている。

男は意味不明の独り言をつぶやいては、とみこうみしながら行列の端から端まで二度行きつ戻りつして、その中の一人の傍らに立つ。思いもかけず男に選ばれてしまった当人は、困惑気味に男を無視するか、眉をひそめて並ぶ場所を変えてしまう。誰に狙いを定めるのか、男の根拠は不確かで、その日その日の気紛れで人を決めているとしか思えない。

男は、そのあとあらためて最後尾につく。それから顎を上げつま先立って、後尾から先頭まで二度見渡し、今朝の行列の長さを測る。自分の後ろに新たに人が並んだのに気がつくと、さっと身を翻して脇に退き、会釈をして場所を譲る。いついかなる時も、列の最後尾に並ぼうとする意志を崩そうとはしない。

やがて、定刻どおり市バスが車体をきしませて到着し、行列は次から次へとバスの中にのみ込まれていく。男は、自分の順番がやってきてもバスに乗ろうとはせず、駆け込み乗車する人の進路を妨害しないよう、一歩も二歩も間隔を開けて、慌ただしくステップを駆け上がる一人一人を見送る。その間も、男の口元からは切れ目なくつぶやき声が漏れ出ている。ほとんどの乗客は、男を無視してバスに乗り込むが、中に愛想笑いで応えたり、冗談口をたたいて行く人もいる。期せずして〝激励〟の言葉をもらえたと知ると、男は浅黒い顔を歪めて両手を上げ、全身で喜びをあらわす。

乗客を満載したバスは、エンジン音を轟かせ巨体をゆすぶりながら渋滞する車列の中に紛れて消え去る。その後姿を、男は直立不動のまま、敬礼の姿勢を取って見送り続ける。

——男を初めて見かけたのは、いつの頃だったのだろうか？

直也は、朝のバス停で男と出会うたびに考える。閑静な住宅街に隣接する城下町のアパートを借り、十数キロメートル離れた勤め先までバス通勤するようになって四年目に入っていたが、つい最近まで男の確かな記憶がなかった。ある日ある朝、どこからともなくふっと姿を現し、そのままありふれた日常の風景の中に溶け込んでしまって、違和感すら抱かなかったのかもしれなかった。

二十六歳になる直也自身、一応社会的に名の通った会社に就職はできたものの、課された仕事をこなすのに日々汲々とするばかりで、他を顧みる余裕などあるはずもなかった生活を思うと、男の存在に気づかなかったのも当然のことかもしれなかった。

男は、それからも依然として変わらぬ服装で、火曜と木曜の朝定刻に姿を現し、列の最後尾に並んで乗客とバスを見送り続けた。

——いったい、あの男は何を考えているのだろう？

不可解な男の所作を見るたびに疑問に捕らわれた。その

一方で、そもそもどこの馬の骨か分からないような人間を、なぜことさらに意識しなければならないんだ、無視していれば済むことではないかと、優柔な己を諌めてもいた。

しかし、男が現れる朝行列につくと、思わず知らず男の影を探している自分に気がついて、いっそう戸惑いを濃くしていった。

日々規律正しい生活を送る男に予想もしない変化が現れたのは、秋も深まり初霜の便りも届き始めた、冷え込みの厳しい朝だった。山颪が強く吹き、停留所に並ぶ人々も襟を立て、マフラーを巻いて、身に染みる寒気に耐えていた。直也も、コート姿で列の中ほどに立ち、身震いしながら今か今かとバスが現れるのを待っていた。そうして、何度か振り返ってバスの姿を確かめているうちに、最後尾に男の姿がないことに気がついた。

――ここ数日の厳しい冷え込みで、体調を崩したのだろうか?

見慣れた日常風景の中のわずかな一片が抜け落ちただけで、こんなにも目に映る様相が変わってしまうのかと、欠落の感覚とでも言うべきものに捕らわれて行列の尽きる辺りを眺めていると、視界の片隅に男の姿が現れた。

今朝は、簡易郵便局と個人病院の間の小路から現れて、いつもより忙しい足取りでひたひたと歩いて来る。吹きすさぶ寒風をものともせず、顎をあげ両手を大きく振って近づいて来る。相も変わらず、薄い背広上下にワイシャツ一枚の出で立ちのままで、二度往復した後やはり列の最後尾についた。変わっていたのは、見るからに怒気を帯びた険しい顔つきだった。

と、男の歩みはなぜかそこで止まらなかった。何を思ったか、長い行列の傍らを真っ直ぐに前進し、しきりに後ろを振り返っては何事かつぶやきながら先頭者の前に立った。今朝は、男の独白が直也の耳にもはっきりと聞き取れた。

「どこまで俺の跡をつけて来るんだッ!」

「チクショウ! 今に思い知らせてやるからな、覚えていろッ!」

目に見えない相手に向かって、激しく怒鳴り散らす闖入者の出現に、突然自分の場所を奪われた中年のサラリーマンは、しばし口を利くのも忘れて呆然と突っ立ったままだった。しかし、公衆道徳を乱してもいささかも悪びれた顔をするわけでもなく、さも当然のごとくふるまう男の態度に、さすがに平静ではいられなくなったのだろう、列の二番目と三番目も加勢して男を取り囲み、身勝手きわまりない行為を口々にとがめだてた。

男は一瞬怯んだように見えた。それでもなお、頑として自分の立つ場所を明け渡そうとはしなかった。謝罪はおろか、三人の言い分にいっさい耳を貸そうとしない強情な態度に、苛立ちを募らせた三人は「ふざけんなッ!」「どけってんだ、この馬鹿野郎ッ!」「謝れッ!」と罵声を浴びせて男に詰めよった。

行列の先頭でただならぬ気配が漂い始めた時、取り囲んだ輪の中から、「ワァーッ!」と悲鳴とも雄たけびともつかない叫び声が上がった。

「ヤクザが僕を殺しにくるんだ! みんな、早く逃げないと殺されるんだよう!」

男は地団太を踏み、激しく頭をかきむしって天を仰ぐと、人目もはばからずに声を限りに泣きわめいた。あまりの急展開に、取り囲んでいた三人のみならず高みの見物を決め込んでいた人たちも、気圧されて数歩退いた。三人の中の一人が、苦笑いを浮かべ首を振りながら、人差し指で自分の頭にクルクルと輪を描いた。残りの二人も、もうお手上げだと両手を広げて渋々列に戻った。

気づまりな空気が漂う中、定刻より遅れてバスが到着し、並んでいた人達は男を尻目に慌ただしく車内に乗り込んだ。その傍らで、男は天を仰いだまま泣き叫んでいた。直也も関わり合いにならないよう、無関心を装って後に続いたが、すれ違いざまに、憐憫の情とも嫌悪の情とも分かちがたい思いが萌してきて、その不可解な心変わりに困惑するばかりだった。

――なぜ我にもなく、そのような心持ちになったのだろうか? 男のただならぬ言動が引き金になったことは否めなかった。しかし、今の自分を鷲づかみにして不安の淵に沈めて止まないものが、もっと別の所に潜んでいることを、直也は心中認めざるを得なかった。

あの耳をつんざくばかりの叫び声。あの一種被害妄想を思わせる意味不明の独り言。それは、直也が小学生の時分に聞き覚えのあった暁子伯母の声に酷似していた。

翌々日の木曜の朝、行列の先頭に男の姿はなかった。公衆の面前で醜態を演じてしまったことを恥じて、足が遠のいたのか、もしくは現れる時刻を意図的にずらしたのか、そのどちらかだろうと直也は思った。いずれにしても、このまま男が行列から消えてくれれば御の字だった。

しかし、翌週の火曜日の朝、男は何事もなかったかのように、同じ時刻に変わらぬ服装で現れた。先週の諍いを見知っていた誰もが驚きを隠さなかったが、努めて男を無視して携帯電話や新聞から目を離さなかった。男は独り言をつぶやきながら、並んでいる一人一人の顔色をうかがうそぶりで歩いて行き、何のためらいもなく列の先頭に立った。またもや場所を奪われたサラリーマン風の〝被害者〟は、不快な感情をあらわにした。しかしそれも一瞬の間で、何も言わずにまた携帯に目を戻した。

男の遠慮ない視線を浴びた直也も、素知らぬ顔でやり過ごした。その心中は、皆と同様意表を突かれ動揺して、言葉もなかった。

――この男は、わざと人を苛立たせるような行動を取って楽しんでいるのか、それとも何の考えもなしに、ただただ自分のやりたいようにやっているにすぎないのか？いったいこの男の頭はまともなのか、それとも狂っているのか？

直也は、次から次へと湧いてくる疑問の連鎖に当惑するばかりだった。

そうして、週に二度のペースで男の不可解な行動を目にする機会が度重なっていくと、直也の心には「この男はどこに住んでいて、どういう暮らしをしているのか」と、男の素性を是が非でも確かめたい衝動に駆られていった。

翌週の木曜日の朝、直也はいつもの時間より早めにアパートを出た。そのまま行列には並ばずに、停留所の手前の信号を渡り、地方銀行の建物と道路を挟んで反対側の、シートのかかっている建築現場の陰に立った。ここなら、バス停とは離れているが、身を隠しながら通り全体を見渡すことができた。どういう了見でそんな子供じみたことをしたのか、単なる興味本位からだったのか、それともかからかい半分の戯れ心が働いたのか、自分でも分からないままでいた。いずれにしても、今日こそは会社を遅刻してまでも何とか男の居所を自分の目で確かめたかった。

男は定刻どおりに現れた。意外にも、今朝は直也のいる建築現場の二軒隣の敷地から、ぽっと出て来た。本当に予測不可能なヤツだとなかばあきれて見ていると、男は群れる小学生の後ろに続いて、信号が青に変わるや、右手に黄色い小旗を高く掲げて横断歩道を渡って行った。

その後は、例によって行列の最後尾に付き、つま先立って先頭まで見渡すと、並ぶ人の顔を一人一人うかがいながら二度往復した。今朝はことに念入りに、行列の顔や周辺を見回すしぐさを繰り返しているのを見た直也は、男はきっと俺の姿を探しているんだと直感した。

バスが到着し、直也からは行列の人々が乗り込む姿は見えなかった。黒煙を吐いてバスが発車した後の停留所には、一人小旗を振ってバスを見送る男が立っていた。最後に敬礼の姿勢を取ると、おもむろに踵を返して、停留所とは逆の方向に歩き出した。直也は、付かず離れずしてその後を追った。男は黄色い小旗を握り締め、下校途中の少年のように、道草を食いながら歩いては立ち止まり、時間をかけて歩を運んだ。その無心な後姿を追っていると、ふと小学時代の自分の下校風景を見ているような思いがして、我知らず懐かしさがこみ上げてきた。

虫を追いかけ石を蹴ったりして、バス停から二十分ほど

歩いていた時だった。何を思ったか、男の足がピタリと止まって、くるりと後ろを振り向いた。虚を衝かれた直也は、すんでの所でブロック塀に身を隠した。男との間隔は三、四軒あっただろうか、気づかれないよう用心して後をつけたつもりだった。とっさに、その場を繕う言い訳をひねり出そうとしたが、空回りした頭の中には何も浮かんで来なかった。もうその時はその時だと、腹を据えて待ち構えていると、男はブロック塀の手前を左に折れて小路に入った。

――遊びに夢中になって、帰る道を通り越してしまったのだろうか？

閑静な住宅地を過ぎると、道幅は更に狭くなってT字路が多くなった。かつてこの辺りは、城下の武家屋敷として威容を誇っていたのだろうが、今はもう昔日の面影を残すものと言えば、小路に添って流れる掘割と、思い出したように現れる古色蒼然とした家屋敷のみになっている。

男は歩いては立ち止まり、人家の庭先に立ち入ったりしながら、休み休み歩いて行った。ふとまた立ち止まると掘割の澄んだ流れをじっと見入っている。流れの中に気になるものがあるようだった。後から男が見入っていたその辺りを見つめると梅花藻（ばいかも）が揺れていた。女の髪のように、流れの中で豊かにうねっていた。

――この男はいったいどこへ行くんだろう？　もしかしたら、家に帰るつもりはないのではないか？

直也の脳裏に、再び疑心がよぎった時だった。男の姿が、壊れて傾きかけた板塀の中にすっとのみ込まれた。直也も遅れまいと歩を早めて男の後に続いた。通りからやや奥まった先に、伸び放題の生け垣に囲まれた、表札のない一軒の古びた家が立っていた。男は、握っていた黄色い小旗を垣根に放り投げ、玄関の引き戸を勢いよく開けると、「ただいまあッ！」と声を上げて家の中に入っていった。

広い庭をかいま見ると、かつては由緒ある家柄の屋敷であったことがうかがえたが、傷み歪んだ瓦屋根は一面苔むして、土壁も所々ひび割れが目立っていた。

その傍らに、椎の木なのか、かなりの樹高がある大木が一本、古屋敷を守るように枝葉を茂らせて立っていた。弱い日差しが届く庭の一角は畑になっていて、冬野菜がぽつりぽつりと緑色の顔を出していた。軒先に所狭しと吊るされた干し大根の下、長い縁側の陽だまりでは、一匹の黒猫が丸くなって眠っていた。静かだった。ここだけが周りから取り残され、時間が止まってしまった不思議な静けさが満ちていた。素性の知れない男の導きによって、思いも寄らない異境に迷い込んでしまった気がした。

直也は、時間が経つのも忘れてぼんやり突っ立っていると、玄関から、母親であろうか和服の上に割烹着を着た白髪まじりの女が現れて、庭先で洗濯物を干し始めた。淑やかな身ごなしで、一枚一枚丁寧にしわを伸ばしながら手際

よく物干し竿にかけていく痩身の立ち姿は、冬の朝の凛としたたたずまいに何よりも似つかわしいものに映った。

――この家に、母子二人で暮らしているのだろうか？

男の年齢が四十代後半あたりだとすれば、母親は七十を超えているのかもしれないが……この母子はどんな暮らしをしているのだろう？

我を忘れて、次から次へと想像を働かせていた直也は、あろうことか他人の敷地に勝手に入り込んで、その生活をのぞき見していたことにようやく気がついた。

良心の呵責にかられ、急いで場を離れようとして、誤って敷石につまずいた。その物音に気づいてこちらを振り向いた女と、目が合ってしまった。半身になった直也は、そのままやり過ごそうとしたが、女のきりりとした眼差しに射すくめられて、両足の自由がきかなくなった。しばし見合ったままどちらも動かないでいたが、身じろぎを始めたのは女の方だった。直也が不審者でないことを見て取ったのか、うりざね顔に柔和な笑みを浮かべて、慎ましやかに挨拶をした。直也も慌てて中途半端なお辞儀を返すと、足早に表通りへ出た。

それからも、男は当然のように行列の先頭に立ち、バスに乗らずに見送り続けて、二週間が過ぎた朝だった。その男が先頭に立って後ろの行列を見渡していたとき、直也はうっかり目を合わせてしまった。素知らぬふりをしてとっさに顔をそらしたが、再び目を戻すと、男はこちらを凝視したまま動かなかった。一度たりとも言葉を交わしたことのない自分を、なにゆえにそれほどまでに一心に見つめるのか、訳が分からなかった。

神経を逆なでされた直也は、たじろぐ己を叱咤して男をにらみ返した。しかし、男には全く通じなかった。そればかりか、更に追い打ちをかけるように、男は行列の先頭を離れると真っ直ぐに直也の元に歩いて来た。その顔には愛想笑いが浮かび、何かもの言いたげなそぶりを見せた。直也は、厭悪をあらわにして無視し続けた。しかし、男はいっこうに臆する風もなく、信愛に満ちた目顔を向けて直也の傍らを動こうとはしなかった。

直也は面食らった。なぜ男が自分に関心を持ったのか、理解できなかった。唯一考えられるのは、二週間前の木曜の愚かな行動だった。家に帰る男の後をつけて無断で他人の庭に入り込み、母親と思しき女性に見とがめられたことが頭に思い浮かんだ。確かにそれは軽率な行為であり、弁解の余地はなかった。ただ、たとえそうであったとしても、今朝の男の〝好意的な行動〟とどうつながるのか、全然見当がつかなかった。

――男の一方的な思い込みなのか、それとも単なる気紛れが、突飛な行動を促したのだろうか？

男にそうするよう、女が仕向けたのかもしれないと疑ってもみたが、それは更にあり得ないことに思われた。

それからは、火曜日と木曜日の朝を迎えると気が滅入って、床から起き上がるのがおっくうになった。あの媚びを含んだ笑い顔を見るのが、たまらなく苦痛だった。バスに乗る時間を前後にずらしてみるか、それとも停留所を替えてみるか、あれこれ考えてはみたものの、どれを取っても朝の負担が増すばかりで現実的ではなかった。何よりも、男の身勝手きわまる振る舞いで、こちらの生活のペースをかき乱されてしまうのが無性に腹立たしかった。

日を追うごとに鬱憤を募らせていった直也は、つい酒の力を借りて同僚に男の迷惑千万な行為をあげつらった。

「そもそもあいつは、散々人に迷惑をかけて、何度注意されてもいけしゃあしゃあとしている奴なんだ。俺は、あいつとは一度も口をきいたことがないんだよ。そいつが何でまた、俺になれなれしく近づいて来て離れようとしないのか、さっぱりわからない」

最初は相づちを打って面白おかしく聞いていた同僚だったが、終わりのない直也の愚痴に嫌気がさしたのか、

「それは、類は友を呼ぶってことさ。お前その男に愛されているんじゃないのか？」と冗談口をたたくと、もう一人が「いや、同病相哀れむと言った方がいいな」と鼻白んだ顔で話を切った。たちまち真顔になった直也を見ると、二人は「冗談だよ、冗談」と笑ってその場を収めたが、直也にはそれが冗談とは到底思えなかった。

生来人づきあいが苦手な性格で、職場においても孤立気味だった直也は、この二人の同僚とはどことなく気の合う所があって、機会があれば酒を酌み交わして憂さ晴らしをして来た。その甘えもあって、つい気を許して愚痴をこぼしてしまった。たちまち酔いがさめてしまった直也に、思いも寄らない疑念が萌した。

――馬が合うと信じたのは、俺の一方的な思い込みだったのではないか？　冗談だと嘘をついて言い逃れをしているけれども、こいつらは最初から俺をいじめる目的で近づいて来て、俺が追いつめられていく姿を見て楽しんでいるんだ。クソッ！　その手には乗らないぞ。今に見てろ、必ず思い知らせてやるからなッ！

直也は憤然として席を立つと、粉雪の舞う裏通りを一人歩み去った。

二

その年は、例年になく雪が多かった。正月気分もあらかた抜けた大寒の翌朝は、この冬二度目の大雪着雪注意報が出て、間もなく警報に切り替わった。予報にたがわず、昼を境に間断なく雪が降りしきり、辺り一面みるみる銀世界となって、にわかに雪国の様相を呈していった。随所で頻

発する交通渋滞や事故が引きも切らずニュースで流れる中、直也は早めに仕事を切り上げて帰途についた。しかしようやく乗り込むことのできた路線バスが大渋滞に巻き込まれて、郊外のアパートにたどり着いた時には二十一時を回っていた。

石油ストーブも効をなさない凍え切ったアパートの六畳間で、途中のコンビニで買って来た弁当に箸をつけたが食欲はなく、缶ビールで流し込みながらテレビが映し出す映像をぼんやり追っていた。雪の峠道でスリップして蜿蜿と立ち往生する大型トラックの列や、バスやタクシー乗り場に長蛇の列を作る交通パニックの場景が繰り返し流れていた。持ち帰った書類に目を通す気力も失せ、もう今夜は風呂に入って早く休もうかと立ち上がった時、テーブルに置いた携帯電話が静寂を破って鳴り響いた。

――こんな夜まで、仕事が追いかけてくるのか？

会社関係の電話ならうっちゃってしまおうと携帯を取り上げると、液晶画面に「H病院」の文字が現れた。予感めいたものを覚えた直也は、一瞬躊躇した後に通話ボタンを押した。

「モシモシ、本多直也さんですか？」

事務的な口調の若い男の声だった。

「はい。そうですが」

「緊急連絡先が本多直也さんになっていたので、連絡しました。当病院に入院中の本多暁子さんが、先ほどから危篤状態に陥っています。予断を許さない容態ですので、今すぐこちらへ来てください」

「……」

有無を言わせない居丈高なもの言いに、事の次第を読み切れない直也は、とっさには返答ができなかった。

六十七歳になる暁子伯母は、二か月前に大腸がん末期と診断されてH病院に入院中だった。いざという時の緊急連絡先を決める段になって、実家の父民夫（たみお）から、H病院に一番近い町にいる直也に何とか引き受けてほしいという連絡があった。何で甥である自分が、一度しか会ったことのない伯母の面倒をみなければならないんだと、不快感をあらわにして拒否したが、結局は押し切られる形でやむなく引き受けてしまった。

六十七年間、結婚もせずに薄幸の人生を歩んで来た伯母だった。両親はとうに他界して、頼れる肉親と言えば、もう三人の姉弟だけになっていた。一応頭の片隅には、伯母の身に何かあったら自分が真っ先に駆けつけなければならないのだろうという心の準備はあるにはあった。それがこんなにも急に、しかも今日のような大変な夜に呼び出されるとは思ってもみなかった。

――危篤になったのなら、もっと早く連絡を寄こしてくれてもいいのに。よりにもよって、何でこんな大雪の夜に

……

腕時計の針は、もう二十二時近くを指していた。ここからH病院まで、およそ三十キロ以上あるだろうか。最終のバスはもう発車した後だし、車を運転しようにも、既に酒を飲んでしまっている。雪で交通マヒの状態の中、病院に行きつくまでにいったいどれほどの時間がかかるのか、全く見当がつかなかった。迷いに迷った末に、直也は「あの、明日の朝ではだめですか？」と口走ってしまった。相手はあっけにとられたのか、一瞬口ごもったが、

「駄目です、今すぐ来てください。時間がかかっても構いませんから」と語気鋭く言った。「わかりました。何とか駆けつけます」と答えている途中で電話が切れた。直也は携帯を耳に当てたまま、壁にかけたカレンダーの数字を意味もなく眺めていた。何とかタクシーを捕まえて地下鉄に乗り、在来線の電車を乗り継いで最寄りの駅で降りる。そこからまたタクシーで病院に向かうことになる。この混乱の中、果たして着くのは何時頃になるだろうか……この期に及んであれこれ考えても仕方がない、とにかく行くしかないんだと身を励まし、濃い色の背広に着替えて表に出た。

依然として混雑が続く地下鉄の中は、暖房がきき過ぎている上に、たちこめるひといきれで息苦しさがいや増した。直也は、水の染みた座席に身を沈めて目をつむった。

――伯母が危篤だと言うのに、俺はなんで「明日の朝ではだめですか？」などと、愚かしいことを口走ってしまったんだろう？　俺はそれほどまでに伯母を疎んじて、関わり合いになることを避けていたのだろうか？　いや、俺は決して伯母を蔑ろにするような人間じゃないはずだ。あの言葉は、苦しまぎれに思わず口をついて出てしまったもので、決して本意ではなかったはずだ。すべて、今日の雪が悪いんだ……

直也は、努めてそう自分に言い聞かせようとした。しかし、堂々巡りの果てに行きついた自分勝手の理屈は、所詮稚拙な言い訳に過ぎず、直也の心を癒す力にはならなかった。

二十六年の間に、一度しか会ったことのない伯母だった。その一度きりの思わぬ出会いが、当時少年だった直也の心に言い知れぬ不安と恐怖を与え、伯母を見る目を一変させてしまった。

十五年前の、夏休みに入ってまだ間もない昼下がりだった。本多家の玄関に、学生服に身を包み、学生帽を目深にかぶった一人の〝男〟が立った。友達と川遊びに行こうと、ガラス箱とヤスを持って表に飛び出そうとした直也は、危うく男と衝突しそうになって立ちすくんだ。挨拶の言葉もなく、玄関に入り込んだ黒づくめの訪問者は、直也に向かって会釈したように見えたが、直也はいったいどこの誰なの

か見当がつかず、呆然として目の前の男を見つめるばかりだった。

しばし言葉もなく突っ立ったままの直也だったが、かろうじて自分を取り戻して相手を見直してみた。見れば見るほど、どこか言いがたい違和感があった。帽子の庇（ひさし）で顔の上半分は隠れていたが、その下の白い肌はきめ細やかで、ふくよかな頬の輪郭も鮮やかな唇の色も、学生服姿には不釣り合いの感が強かった。

何かがおかしい——得体の知れない登場人物に薄気味悪さを覚えた直也は、母を呼びに台所に引き返そうとした。その時、学生帽の下の白々しい顔が奇妙に歪んで唇が大きく開き、

「ホッ、ホッ、ホッ！」とかん高い奇声が上がった。続けて勢いよく帽子を取ると、

「タミオちゃん、ただいまあ！」と直也の父の名を呼んだ。直也ははっと我に返った。甥である自分を父の民夫（たみお）と勘違いして、直立不動のまま敬礼をしている女はいったい誰なのか？　なぜ女なのに学生服を着ているのか？

直也はとっさには事の次第が飲み込めず、なおも立ち続けたまま、無邪気に浮かれる女の顔を食い入るように見た。白い頬は紅潮し、落ち着きのない切れ長の目は、熱に浮かされたように異様な輝きを帯びていた。

突然、背中で「ヒィーッ！」と鋭い悲鳴が上がった。その叫声につられて、直也も危うく声を上げそうになった。かろうじて喉元にこらえて振り返ると、割烹着姿の母の節子（せつこ）が、両手で口を押さえたまま棒立ちになっていた。その引きつった顔からは血の気が失せ、大きく見開かれた眼は女の姿に釘づけになっていた。玄関でのただならぬ騒動を聞きつけた妹の梨沙（りさ）も、母の腰にすがり付くようにして恐る恐る女の様子をうかがっていた。

異様な出で立ちの訪問者が暁子本人と分かったものの、不意打ちを食って狼狽する三人の背後から、音もなく暁子の母すゑが姿を現した。八十を過ぎて腰は曲がってしまい、毎日の立ち居振る舞いにも支障をきたしていたが、目の前のすゑは、足の運びも身のこなしも驚くほど滑らかだった。唖然とするばかりの三人の前に進み出て、板の間にちんまりと正座し、娘の顔を見上げると、しわだらけの顔にまどかな笑みを浮かべて

「よう帰ってきたなあ」と言って深々とお辞儀をした。

「母ちゃん、ただいまあ！　会いたかったよう！」

暁子はまたかん高い声を張り上げると、両手でいきなりすゑの体に抱きついた。すゑは、愛娘（まなむすめ）の容赦ない抱擁に細い体を大きくのけぞらせながらも、ウン、ウンと笑顔でうなずいて暁子の背中を優しくさすった。今の暁子は、どうやら自分の母親の見分けはついているのかもしれなかった。

とにかくまずは上にあがってからと、節子は暁子を促して茶の間に座らせた。すゑが茶を入れている間に、節子は梨沙に耳打ちして、畑仕事をしている夫の民夫を呼びに走らせた。

その間、暁子はすゑと節子を相手に、脈絡の欠いた話を息つく暇もなく話し続けた。今日は（暁子の幼馴染だった）タカちゃんと結婚することが決まったので、それを知らせに帰って来たと満面の笑顔でしゃべったかと思うと、急に辺りをうかがうそぶりを見せて、自分は病院の医者に毒をもられて殺されそうになったから村に逃げ帰って来た、警察にも追いかけられているので、これから静岡に逃げなければならない、このことは絶対誰にも言わないでほしいと声を潜めて、金銭の用立てを懇願した。

——何で静岡なんだろう？

三人の輪から離れて話を聞いていた直也は、素朴な疑問を抱いたが、口には出さなかった。

暁子の話が一段落したのを見計らって、すゑが

「どうやってここまで来たんだ？　まさが一人で電車に乗って来たんでねえべな？」

と眉をひそめて聞いた。これまでに、暁子は病院のあるS市まで一人で旅をしたことがなかった。

「おんちゃんと来た」

どこまでも無邪気な返答に、すゑの胸は騒いだ。間髪を入れずに、おんちゃんに何もされなかったかと口から出かかったが、かろうじてこらえて聞き方を変えた。

「どんなおんちゃんだったんだ？　名前は聞いたのが？」

「電車の中で、暁子の話をいっぱい聞いてくれて、駅でバスに乗せてくれたよ」

「バス代はどうしたんだ？」

「おんちゃんが払ってくれた」

暁子はそう答えると、これも買ってもらったんだと言って、ナップザックの中から冷凍ミカンとキャラメルの箱を取り出した。

「俺が作ってやったお守り見せでみろ」

すゑは、暁子の首にかけていた赤い布地のお守り袋を受け取って、中を確かめた。そこには、万一のために住所と名前等を書いた手紙と数枚の千円札が入れてあった。思ったとおり、すべて消えていた。

——これくらいの被害で済んだんだから、不幸中の幸いとしなくてなんねえべ……。

すゑはため息を一つつくと、お守り袋を暁子に返した。

「この学生帽と学生服はどうしたんだ？　誰ががら借りできたのが？」

今ではもう、めったなことでは驚かなくなったすゑだったが、娘のあまりにあどけない答えが返ってきて愕然としてしまった。

「店で着てきた」

「金払わないでが？」

暁子は黙ったままでうなずきもしなかった。やはり、店で万引きして着てきたと考えざるを得なかった。

すゑは、暗然たる面持ちでしばし娘の顔を見つめていたが、たちまち厳しい顔つきになって、

「人様のものに手をかげだら盗人だぞ。神様のばちが当だって、手がもげでしまうんだがんな。ほんでもいいのが？」と叱責した。それで終わらず、暁子の前に左手を突き出して、右手で勢いよく切るまねをした。効果はてきめんで、暁子は泣きべそをかいてもうしないからと何べんも謝った。

「わがった、わがった。もうしないんだな。ほんなら俺が神様に頼んでやっから安心しろ」

母親から優しい口調で慰められると、眉間に寄った皺が引いて笑顔が戻り、幼児のようにすゑの体にしがみついた。

その伯母の年齢が五十二歳と母から知らされた時、直也はわが耳を疑って二の句が継げなかった。

手先が器用で、裁縫や編み物が得意だった暁子は、中学を卒業すると集団就職で村を離れた。縫製工場で一生懸命働いて金を貯め、東京で洋服の店を出したいという志を抱いて旅立ったが、都会の生活や職場の人間関係になじめず、半年も経たないうちに、時を置かず家に帰りたいと手紙で書いて寄こし、突然今すぐ迎えに来てほしいと電話で訴えるようになった。その度にすゑは、「辛抱が肝心だ、お前と一緒に勤めた佐知ちゃんも恵ちゃんも、東京で頑張っているんだから」と励ましの言葉を送ってやった。その後、しばらくは音信が途絶えた。すゑは、自分の言うことを聞いて辛抱して働いているんだろうと思っていた。その翌年の三月に、暁子は何の前触れもなく玄関口に現れた。

母ちゃんに言われたとおり、毎日我慢して働いて来たけれど、もうこらえきれなくなって、誰にも断らずに帰ってきてしまった。もう職場には戻りたくないと言って、声を上げて泣いた。

「この根性なしがッ！」

娘の泣き言を聞いた進之助は、卓をたたいて一喝した。それでもなお、聞き分けのない態度に激怒して手を上げた。すゑはきっと夫をにらみつけると、身を挺して泣き震える娘の身をかばった。

二日後に、迎えに来た職場の担当者と顔を合わせると、暁子は再び取り乱して、「絶対帰らないぞッ！」「おまえは敵だッ！」と叫んだまま部屋に閉じこもった。進之助は、激しく抵抗する暁子を力づくで引きずり出し、

「ごこにはおめの居場所はねんだがらな。二度とこの家の敷居をまたいでなんねぞ」と無理矢理言うことを聞かせた。家族との訣別の宣告を受けて、暁子は呆けた姿で帰って行った。

職場の暁子の言動に異状が現れたのは、引き戻されて間もなくのことだった。表情が乏しくなり、訳もなくふさぎ込んでいたかと思うと、調子外れのかん高い笑い声をあげて周りを驚かしたり、だれかれ見境なく罵詈を浴びせて、果てには暴力沙汰に及ぶことも度重なった。時には、職場からふっと姿を消し、一日、二日戻って来ないこともあった。

それでも、集団就職する若者は「金の卵」ともてはやされ大事にされていたから、会社の労わりは厚かった。しかし、今度は工場内のゴミ箱に火を付けて、立ち上る炎を憑かれた目で眺めているのを見つけられ、放置しておけなくなった。その度にポケットのマッチ箱を取り上げて、何度も言って聞かせたが、放火癖は止まなかった。

常軌を逸した振る舞いが日を追うごとに高じていき、もうこれ以上職場に置いておくわけにはいかなくなって、暁子は以前連れ戻しに来た上司に伴われて村に帰って来た。念願かなって、ようやく家に帰ることができた喜びに夢中ではしゃぎ回る暁子の傍らで、上司は申し訳ありませんでしたと何度も頭を下げて帰って行った。

生まれ育った故郷に戻れて、少しは気持ちが落ち着くかと思われたが、ひとたび蝕まれた心は癒えることがなく、再び放火癖があらわれて何度もボヤ騒ぎを引き起こした。家族は迷いに迷った。職場に置いておけなくなった暁子は、村にも置いてはおけなくなった。いったいどうしたらいいのか？　病院で診てもらった方がいいのか？　でも、そんなことが村人に知れ渡ったら、家族にどんな運命が待っているか分からなかった。考えただけでどうしようもなく胸がふさがって、立ち往生するばかりだった。

最も強硬に病院行きを反対したのは、あくまで世間体に拘泥する進之助だった。感情的な遣り取りに終始するばかりで、いたずらに時間だけが過ぎていった。それに終止符を打ったのは、毅然として夫に立ち向かったすゑの、「このまま暁子を殺すつもりがッ！」という一言だった。

暁子は民夫と節子に伴われて、村から遠く離れたS市の病院で診察を受け、そのまま入院生活に入った。暁子の付き添いを息子夫婦に託したすゑは、三人の姿が裏道の杉林の中に隠れてしまっても、身じろぎ一つせずにいつまでも見送り続けた。

この別離を境に、家の中は極力暁子のことには触れまいとする暗黙の了解と言うべき陰鬱な空気が立ちこめた。村人の目をはばかり、自ら門戸を閉ざし、一つ家で暮らす各々も寄るべきよすがを失って孤立していった。更にそれに追い打ちをかけるように、暁子からは「家に帰りたいから、病院に迎えに来てほしい」と催促する葉書が再三届いた。

家族間で再び暁子が話の中心となり、その乱れのない筆

跡を見た誰もが戸惑いを濃くし、無力感に苛まれて言葉を失った。長い沈黙の果てに、確かめるように愛娘の葉書を手に取ったすゑが、しわがれ声でつぶやいた。

「おらがもっと暁子をしっかり捕まえていれば、あだなことにはなんねがったんだ。母ちゃんが悪がったんだ、かんべんしてけろ」

すゑは、それから四年後に八十四歳で逝ったが、息を引き取る間際まで暁子のことを気遣い、幾度となく「おらがもっと……」と悔恨の情を口にした。無数にしわの寄った唇からこぼれ出たつぶやきが、いったい何を意味するのか、十一歳だった直也には分かるはずもなかったが、伯母と初めて出会った時の異様な体験の記憶は、多感な心に癒しがたい傷を刻みつけ、決して消えることはなかった。

――自分の体の中を、伯母と同じ血が流れている。そのまがまがしい暗流がいつか突然、抑制の意志を断ち切って表に噴き出してしまうのではないか？　伯母と同じように、自分が自分でなくなる時が、いつかやって来るのではないか？　その時が来たら、自分はいったいどうなってしまうんだろう？

直也は、誰一人として答えを導き出せない問いを際限なく繰り返して、自らを袋小路へと追い詰めていった。誰にも自分の秘密を知られたくない――直也は意識的に仲間の輪から離れていき、孤独の壁の中で過ごす時間が増えていった。しかし、いざ独りきりになってしまうと、以前にも増して血の不安が頭をもたげてきて、胸がふさがり心身の自由を奪っていった。

直也は、再び表に戻るしかなかった。

三

二時間かけてH病院にたどり着いた時には、雪はすっかり上がっていた。積もるにまかせたままの道路は、雪が深い上に轍（わだち）が固く凍りついてしまって、何度も足を取られ行きなずんだ。目指す三階建ての病院は、建てられてからだいぶ年数がたっていて、雪明りの夜目にも老朽化が著しく映った。

受付口の脇に取り付けられた呼び出しのボタンを押して取次ぎを請うと、「はい、今行きまーす」と聞き覚えのある男の声が返ってきた。ああ、さっきの電話の主だと気がついて、いざ顔を合わせたらどう弁解しようか迷いながら待ってみたが、現れる気配はなかった。再度ボタンを押し、声を高くして来訪を告げた。依然として何の物音もしなかった。仕方なくスリッパに履き替えて、電燈が間遠にともる隧道（すいどう）のような廊下を、ことさら足音を大きくして歩を運んだ。

と、階段を勢いよく駆け下りてくる音がして、白衣姿の

若い医者が現れた。直也が、「本多直也です。遅くなって申し訳ありませんでした」と謝ると、医者は一礼して

「お待ちしていました。どうぞこちらへ」と踵を返し、二階の明かりのついた病室に案内した。予断を許さない状態だと言われていたので、慌ただしい雰囲気の病室を予想していたが、病院の中は深い静寂に包まれていた。

ドアの脇のネームプレイトに、「本多暁子」の名前があるのを確認して部屋の中に入ると、目の前に白髪の医者が立っていた。その傍らのベッドには、顔を白い布で覆われた伯母らしき人が横たわってた。

「やはり間に合わなかったのか……」

そう心の中でつぶやいた途端、張りつめていた気持ちが一気に引いていった。

「どうぞお顔をご覧になって下さい」と促されたものの、直也の手は動かなかった。伯母とは十五年前に一度会ったきりで、今顔を見ても果たして伯母本人だと確認できるかどうか自信がなかった。直也は、ぎこちない手つきで布をめくり上げた。はっとするほどに頬がやせこけ、髪も白くなっていて、十五年前の面影はどこにも認められなかった。

半信半疑のまま再び布を顔に戻して、「ありがとうございました。お世話になりました」と頭を下げると、医者は腕時計と壁かけの時計を交互に見た後、

「本多暁子様は、本日×月×日午後十一時五十七分にお亡くなりにました。ご愁傷様です」と告げて黙祷した。

直也も、医者に倣って目を閉じて祈った。その心中は、意外の感に打たれていた。今まさに息を引き取ったばかりの患者を前にして、医者が遺族に死亡時刻を告げる場面は何度か映像でも目にしてきた。それが、伯母の場合は命を閉じた瞬間ではなく、親族に当たる直也の立ち会いを待って決められたことに、奇異の念を抱いたばかりでなく、一種後ろめたい思いが残った。

――それは、あくまでも伯母の場合に限って、便宜的に処置されたものなのだろうか？

病院にはエレベーターが設置されてなく、伯母の体はベッドから担架に移されて、二人の医者と直也の他にもう一人初老の事務員も加わり、狭い階段をかつぎ下ろして地下の霊安室に安置した。息の上がった事務員は、しきりに腕をさすりながら、「いやァ、若い人がいると助かりますワ」と呻くような声を上げた。直也も「ご面倒をおかけして、申し訳ありませんでした」と応じたが、死者を哀悼する場面の遣り取りとしては、場違いの感が否めなかった。

この時点で、時計の針は午前一時近くを指していた。父の民夫に、先程伯母が息を引き取ったことを連絡した。父は、「そうか」と言った切り黙ったままだった。直也が電話を切ろうとすると、村も大雪に見舞われて、今日中に病院に着けるかどうか見通しがつかないので、迷惑をかける

が、急を要する手続き等はお前がやってほしい旨を一気にしゃべった。

一応心の準備はしていたので、そのまま諾ったものの、気になって葬儀のことを尋ねた。父はもうその段取りはしてあって、伯母の住んでいた町でとり行うことにしたと、淡々とした口調で語った。

――やはり、あの土地では伯母の葬式をあげることはできないか……。

偏狭な共同体の中に生きる者にとって、何よりも重んじられるのは世間体だった。父は、あくまでその〝掟〟に従ったまでのことであり、心情的には直也も異議を差しはさむつもりはなかった。

医者の死亡診断書が出るまでの間、直也は控室で待機していた。もう帰宅する公共交通手段はなくなってしまい、これからどうしたらいいか考えあぐねていた。最終手段として、タクシーを使うことも考えてはみたが、持ち合わせも少なく、自宅までの距離を考慮すると、いったいどれくらいの料金がかかるのか見当もつかなかった。

迷いに迷った末、事務員の男に事情を話して、朝まで待合室でもどこでもいいから居させてもらえないかと、無理を承知で頼みこんだ。彼はしばしためらって、あれこれと思いを巡らしている風だったが、「分かりました。宿泊できる施設はないのですが、何とかしましょう」と言って、後で毛布まで用意してくれた。

ようやく自分の時間を取り戻して、長椅子に横になったものの、気が高ぶり眠りはいっこうに訪れなかった。冴えた頭の中は、先程の伯母の死亡時刻の決め方にこだわっていた。

なぜ、医者に伯母の最期の正確な時間を聞かなかったのか、悔やまれた。亡くなった伯母を間にして、医者と直也の両者で取り決められた死の時刻というものが、果たして医学における死亡時刻決定の範疇内のものなのか、それとも今年二度目の大雪と、その影響で直也が遅れてしまったために、便宜的に決められたものなのか？

もしも後者であるならば、伯母は自分の人生に何ら決定権を持つことができなかったばかりでなく、自分の死すらも、この世に正確な時刻を刻むことができなかったことになる。それが伯母の六十七年間の生涯だったのだと思うと、わが事のように胸が痛く締めつけられた。

一睡もできないまま朝を迎えた直也は、混濁した頭で昨夜から深更に及ぶまでの経緯を、時系列に思い出そうと努めた。頭の中は茫漠としたままで取り止めがなかった。とにかく、まずは会社に連絡して休暇を取り、役所に出向いて死亡届と埋火葬許可申請書を提出しなければならなかった。直也は、疲れ切った体に鞭打って長椅子から起き上がると、凍てつく寒気に身を震わせながら病院を後にした。

夕方にようやくたどり着いた両親と直也に見守られて、翌日に暁子は荼毘に付された。その帰り道、火葬場では終始無言だった父の民夫が、「暁子姉の骨は、故郷の墓に入れてやるべ」とぽつりとつぶやいた。

長い間、生地を踏むことができなかった姉への、弟のせめてもの心づくしだった。

葬儀を前に、久方ぶりに四人の姉弟が顔をそろえたが、本多家の墓に埋葬することを快く思わなかった長女の道代は、弟のやることなすことにいちいち不満をあらわにした。対して二女の千穂は、「それじゃ、暁子があまりにもかわいそうでしょう。暁子は、自分の生まれ育ったこの家に、どんなに帰りたかったか分からないのよ。せめて、自分の両親の眠る墓に一緒に入れてあげるのが、暁子の供養になるんじゃないの」と抗って、最後まで民夫をかばった。

千穂は、本多家にいることが長かったために、家のことや暁子の事情をよく知っていて、甥の直也には家の恥になることも包み隠さず話してくれていた。

暁子の遺影にする写真を選ぶ段になって、アルバムを繰ってあれこれ探してみたが、案じていたとおり暁子の写った写真は数えるほどしかなく、十代後半を境にそれ以降は一枚も見当たらなかった。

――それは、伯母の孤独な人生そのものを物語っているんだ……。

丁寧に整理されたアルバムをめくりながら、こんなところにも伯母の薄幸な生涯が印されているのを見出して、直也は暗然たる思いに捕らわれた。

しばし、それぞれ無言のまま一枚一枚写真を見つめていた時だった。

「ああ……」と、千穂の口からため息とも嘆声ともつかない声が漏れ出た。

「懐かしい写真が出てきたわ。これって民夫が一歳の誕生日を迎えた時に、榧の木の下で撮った写真だよねえ」

感にたえない顔で、「覚えている？」と写真を道代と民夫に示した。道代は、ウン、ウンとうなずいて、「よくこんな昔の写真を取っておいたもんだよ。あんたも小っちゃい時はかわいかったんだ」と弟の顔を見て言った。民夫は苦笑したきり黙ってしまった。続けて千穂が、「この榧の木が切り倒されて、もう何年になるんだろう？」と語を継いだ。

「確か、私が中学生の時だったと思うから、もうかれこれ六十年近くたつんだ」

道代は遠くを見る眼差しで、感慨深げに言った。

数百年もの歳月を経て、巨木に成長した一本の榧の木。高くそびえて、四方に枝葉を広げた分だけ緑陰の遊び場が生まれ、村の子どもたちを夢中にさせた大樹だった。その

榧を背景に、姉弟四人で写っている一枚のモノクローム写真。今から半世紀あまり前に、民夫が一歳の誕生日を迎えた記念に撮ったもので、全体に色調が黒くにじんでしまっているが、明暗が強調されているため、むしろ一人一人の輪郭が際立って写っている。

写真の裏には、進之助のものと思われる筆跡で、「民夫満一歳ノ誕生日ニ写ス　成育頗ル順調ナリ」と書いてある。厚紙の化粧台紙に貼り付けられた、いかにも記念写真といった作りで、右下には「××温泉シバタ写真館」と印刷してある。この年の五年前に、長男だった貞彦（さだひこ）が三歳で急逝していたこともあって、二男の民夫の誕生と順調な成長は、進之助とすゑ夫婦にとって喜びもひとしおだった。

写真の中央に、まだ頭の毛が生えそろわない丸裸の民夫が、花柄の布に覆われた台の上にえんこして、両手で足の指を摘まんでいる。そのいたいけな眼差しは、左斜め方向に向けられている。視線の先に誰かいて、民夫の注意を引きつけているのか、じっとしたまま座っている。民夫の後ろには、髪をひっつめにした長女の道代が、おちょぼ口に柔らかな笑みをたたえて立っている。その二本の手は、民夫が台から落ちないようにと、ぷくぷくしたわき腹を包むように支えている。

二人の両脇には、二女の千穂と三女の暁子が、どちらもおかっぱ頭に振袖姿で立っている。民夫の左隣に写る草履を履いた千穂は、気をつけをして、精いっぱいお腹を突き出している。恥ずかしいのか、上目づかいになって、カメラの方を見ようとしていない。

三人三様にレンズから目をそらして写っている中で、なぜか暁子だけは、体を横向きにしながら顔はカメラをにらむようにして立っている。色白で目鼻だちの整った顔だが、レンズを見つめる切れ長の目は怯えの色に満ち、唇だけはきかん気強く真一文字に結んでいる。下駄を履いた足は不安定に傾いていて、歩き出そうとしたところを突然後ろから引き止められたかのように、左足のつま先が地面から浮いている。

――なぜ、暁子伯母だけが横を向いたまま写っているのだろう？　なぜ、わが子の誕生記念写真なのに、両親が一緒に写っていないんだろう？

直也の二つの疑問に、千穂は記憶をたぐり寄せる面持ちで答えた。

「父さんも母さんも写真には写っていないけれども、この場にいたのよ。父さんは、民夫がちゃんと台の上に座っているよう、地べたにしゃがんで注意を引きつけていたし、母さんは道代姉さんの後ろに隠れて、私と暁子が逃げ出さないよう二人の着物の袂をつかんでいたんだって」

そうだったのか――千穂の言葉を反芻した直也の目に、写真には写っていない祖父母の姿がありありと見える気がした。なぜ、一歳の民夫がぐずりもせずに行儀よく台の上に座って、斜め下方に目を遣っていたのか、なぜ、千穂伯母の体がそり気味になり、暁子伯母が横向きになったままだったのか、謎が解けて、垂れこめていた霧がいっぺんに晴れた気持ちになった。

今まで見えなかったものが、あることをきっかけに、まるであぶり出しのようにありありと見えてくる。それを目の当たりにした直也は

「そうか。それじゃここに写っている手は、すゑばあさんの手だったのか」と合点がいった顔でつぶやいた。それを聞いた千穂は怪訝な顔になって、どれどれと目を細めて写真を眺めていたが、

「違うよ。これは母さんの手じゃない。暁子の着物の袂だよ。ねえ？」

千穂はそう言うと、道代に写真を手渡した。道代も同じ格好になって、しばし目を凝らした後

「そうだよ。これはすゑばあちゃんの手じゃないよ」と千穂の言を認めた。

直也はとまどった。そんなはずはないだろうと、改めて写真を食い入るように見た。一歳の父の座る台座の陰から暁子伯母に伸びているのは、やはり祖母の手に間違いなかった。しかし、それを改めて三人に質すのはためらわれた。自分には見えている手が、父や千穂伯母や道代伯母には見えていない。逆を言えば、三人にはちゃんと見えているものが、自分には見えていないということになるのか？

それがいったい何を意味するのか、どう考えたらいいのか見当がつかず、戸惑いばかりが大きくなっていった直也の耳に、「そう言えば、暁子も同じようなことを口にしていたわね」と、千穂のつぶやく声が聞こえてきた。

――それは、他の人には見えないものが、俺と暁子伯母の目には見えているということなのか？

耳を疑うばかりの一言を受け、胸がつぶれて口を利くこともままならなくなった直也に、千穂は

「この写真には、母さんの辛く悲しい思いがこめられているんだよ」と前置きして、すゑの切々たる心情を語った。

「母さんは、この写真を見るたびに、『おらがもっと暁子をしっかりつかまえていれば、あだなごどにはなんねがったんだ。母ちゃんが悪がったんだ、かんべんしてけろ』って口癖のように嘆いて死んでいったのよ。暁子を後に残していくのが、どんなに心残りだったかしれないわ」

――「あだなごど」か……。暁子伯母の葉書を読んだ時も、祖母は同じことをつぶやいていた。

直也の脳裏に、少年時の暁子伯母との別れの場面が鮮明によみがえった。祖母は、暁子が病気になったのは自分のせいだと思いつめて、自らを咎め悔やみ続けてきた。娘がいつか突然、母の手綱を断ち切って暴れ出すことを恐れ、

逃げようとする袂を必死に捕まえて離すまいと心してきたが、力及ばなかった。

しかし、それは決して祖母のせいではない。必死につかまえようとする母の力よりも、逃れようとする娘の力の方が、何倍も勝っていたのだ。気丈夫で心の内をおくびにも出さない性格だったゆえに、誰もその沈潜する悲しみを忖度することができなかった。

直也は、暁子伯母の体に潜む血の力に恐れおののいた。本多家に背を向けて、逃れようともがき苦しんでみても、しまいには、同じ宿縁の血が自分の中をも赤々と流れている恐怖を見限ることができなかった。

四

暁子の葬儀が終わると、皆それぞれ自分の生活する場所に戻って行った。直也もアパートに帰ると、何も食べずに冷たい蒲団に潜り込んでひたすら眠り続けた。目を覚ました時には、部屋の中は明るくなっていて、時計は午前の八時を回っていた。よくもこんなに眠れたものだとなかば呆れながらも、昼過ぎまで床に臥せって半睡のまま過ごした。依然として食欲はなく、悪寒がして全身がだるかった。顧みると、伯母が危篤に陥ったあの大雪の晩から、すでに風邪気味だったのかもしれなかった。

遠くでサイレンが鳴っていた。耳をそばだてると、「カンカンカン」と鐘音もまじっていた。また火事か――ここ数日空気の乾燥が進み、連続して火災が発生していた。午後からは風も強くなっていて、大事にならなければと思って聞くともなしに聞いていると、いつの間にかサイレンの音が鳴り止んでいた。

届け出た休暇は明日までだった。このままでは、体調を崩して会社に出られなくなると危ぶみ、おぼつかない足取りで表に出て食料と風邪薬を買って来た。インスタントラーメンのカップに湯を注いだが、食欲は戻らなかった。数口だけすすって薬を飲み、テレビを観ながらうつらうつらしているうちに、眠りに落ちていた。

闇を切り裂く鋭い声で「直也！　直也！　こっちに来いッ！」と自分の名を呼んでいる。声のする方に懐中電灯を向けると、真ん円い光の輪の中にバス停で出会う男が立っていて、「こっちだ、こっちだ」としきりに手招きしている。なぜ自分の名前を知っているのか腑に落ちないまま駆け寄ると、男はクルリと背中を見せて「お前の家がボウボウ燃えているから、これを持って早く消しに行けッ！」と無理矢理バケツを握らせる。見ると、男の足もとにはおびただしい数のバケツが所狭しと並んでいる。どれもこれも、水の入っていない空バケツばかりだ。

男は歓喜に声を震わせて「燃えろ！　燃えろ！　どんど

ん燃えろッ！」と、手をたたき小躍りして走って行く。いつの間にか男の背中には暁子伯母がおぶさっていて、「ハア　ヨーイヨーイ　ヨーイトナッ！」と声を限りに叫んでいる。直也も両手に空のバケツを持って、遅れまいと二人の後をついて行く。突然、「ボン！」と耳を聾する破裂音が轟き、行く手の凍てついた闇を焦がして巨大な火柱が立ち上り、氷に覆われた地平を赤々と染め上げた。

「もう間に合わない！」

断末魔の叫びを上げて屋根が崩れ落ち、勢いよく飛び散った火の粉が体中に降りかかってくる。真紅に染め抜かれた夜空を震わせて、けたたましく打ち鳴らされる火の見櫓の鐘の音に総身が粟立つ。狂暴な火炎の海に、なすすべを失った幾人もの黒い影がいたずらに右往左往する。消防ポンプ車も、玩具と化して炎に包まれる。

「ハァーイヨー　コトシャ　ホウネンダーヨ　ハァーコーリャコリャ……ヤレサナー　コメガナルヨー」

巻き上がる旋風に乗って、切れ切れに聞き覚えのある歌声が伝ってくる。泥人形のようにゆるゆると身じろぎする黒い群れに交じって、花柄模様の振袖を着たおかっぱ頭の暁子が、空にかざした両手をゆらゆらさせ、かん高い奇声を発して踊っている。下駄を履いた足が地面を蹴り上げるたびに、ぱっと火花が辺り一面に弾け散って、闇を焦がす。

「火を付けたのは、暁子だぞ。今お前に、その正体を見せてやる」

男はそう言うと、ポケットからライターを取り出して、カチリ、カチリと火を付けたり消したりしている。なぜそんなことを言うんだと反駁しようとするが、煙にむせる喉からは声が出ない。

「お前は火事を見ているんじゃない。〝キツネビ〟を見ているんだよ」

そう言うなりライターの火を消し、右手で目の前を円く拭く仕草をすると、紅蓮の炎に包まれていた火事場が、みるみる漆黒の闇に飲み込まれていく。今度は、提灯に似た橙色の明かりが、遠くにポッ、ポッ、ポッと並んで現れ、こちらが消えるとあちらがともって次々に移ってゆく。

「〝キツネビ〟が遠くに見えていても、そんな時には、キツネは見ている人間の隣にいるんだ。ほら、隣を見てみろよ」

そこには、学生服に学生帽姿の暁子が、真っ赤な炎の彼岸花に取り囲まれて敬礼姿で立っている。

「これが暁子の正体だ。お前にはちゃんと見えるはずだ。この俺が見えるんだからな」

男が暁子に同意を求めると、暁子は「ホッ！　ホッ！　ホッ！」とかん高い奇声を上げて、白く長い腕を誘うように伸ばしてくる。逃げても逃げても、その手はどこまでも背中を追いかけてじりじり迫って来る。

「ナオちゃん、つかまえたァ！」

足がもつれて、もんどり打って倒れ込んだ鼻先に、真白い狐顔の女が喚声を上げた。

冬の日脚は驚くほど早く、再び目覚めた時には、冷え切った六畳間はすでに薄闇が漂っていた。夢にうなされながらかいた汗が体を冷やし、悪寒が一層高じている気がしてならなかった。市販の薬では効かないのか、頭痛もひどくなる一方で、額に手をやると思わぬ高熱が伝わってきて、はっとした。とにかく腹に入れるものを入れて薬を飲み、蒲団の中で安静にしているほかはなかった。

横になって目をつむっても、昨晩見た夢のことが頭から離れなかった。夢のほとんどは荒唐無稽の世界で、信じるには足らないものだと分かっているつもりだったが、思わぬ所に差し挟まれた記憶の断片とも言うべき場景に出会うと、その真偽のほどが曖昧になった。とりわけ、闇の中で男が吐いた「お前にはちゃんと見えるはずだ。この俺が見えるんだからな」という忌々しい文句に捕らわれた。

「そう言えば、暁子も同じようなことを口にしていたわね」とつぶやくように言った千穂伯母の言葉がよみがえった。父の誕生記念写真の中に、祖母の手を見たのは自分と暁子伯母だけだった。

——その厭わしい記憶が、今度は夢の中の男の口を借りてまで俺を苛もうとしているのか？

泥濘にはまりこんだ精神の疲弊が、男にそう言わせたのか、それとも、累代の宿縁の血がそう言うように男に仕向けたのか、考えても答えは導き出せなかった。その夜も、直也は男の夢にうなされた。

真夜中に咳が止まらなくなった。直也は、やむなく病院で診察を受けた。医者からは、風邪をこじらせて急性肺炎になりかかっている危険な状態で、このまま放って治療を受けないでいたら、大変なことになっていたんですよと厳しく諭された。

ようやく会社に復帰できたのは、伯母の死から十五日たった火曜の朝だった。直也は、いつもの時刻にバス停に並んだ。模糊とした頭の中を占めていたのは、机の上に山と積まれているであろう書類の山を、今日一日で片づけられるのか、二週間のブランクで、果たして皆のペースについて行けるのかという不安だった。

しかし、それにも増して直也の心を落ち着かなくしたのは、あの男とまたここで顔を突き合わせなければならないのかという危惧と苛立ちだった。数日前に見た夢の中で、男が言い放った「お前にはちゃんと見えるはずだ。この俺が見えるんだからな」という言葉が再びよみがえった。それはあくまでも夢の中の話であり、現実の男とは何のつながりもなかったが、気がつくと、俺はいったいどんな顔を

して男と向き合えばいいんだろうと、そればかりに固執していた。それゆえに、停留所に最後まで男が現れないのを確信できた時は、張りつめた気持ちがゆるんでしまって、バスが到着したのも気づかないでいた。

二日後の木曜の朝の行列にも、男の姿はなかった。以前にもこれと同じことがあった。その時は翌週には現れたので、今度も自分と同じく風邪でも引いたかして寝込んでいるのかもしれず、治ったらまた何事もなかったように我が物顔で行列の先頭に立つか、それとも俺の隣に立ってバスを見送るんだろう。直也は、あえてその程度にしか考えないようにした。

正直なところ、伯母の死によって心に巣食っていたわだかまりに一応の片がついて、幾分胸のつかえが下りた気持ちになっていた。今はそれに加えて、執拗につきまとっていた男が目の前から消え去って、すり減らした神経がなだめられた思いも加わっていた。

男は、翌週もその翌週も姿を現さなかった。訳もなくつきまとう人間がいなくなって、しばし穏やかな気分に浸っていた直也だったが、一月近く男の顔を見ない朝が続くと、もしかして男の身に何かあったのだろうかと、無性に気になり出した。今日こそは、仕舞屋と総菜店の間の路地裏から、それともコインパーキングの奥のなまこ壁の土蔵の裏から、もしくは簡易郵便局と個人病院の間の小路から、いつもと変わらぬ背広姿にナップザックを背負って歩いて来るだろうと待ってみた。しかし、男はどこからも現れなかった。

男の顔を見ない日が更に続くと、行列に並ぶ直也は胸騒ぎがして落ち着かなくなった。今までは、意識的に頭の片隅に追いやっていたはずの男の顔が、今は抑制を失って頭の真ん中にどっかと座り込み、てこでも動かなくなっていた。なぜそんなことになってしまったのか、自分で自分の心がつかめなかった。

——きっと、男の身に何かあったに違いない。

真っ先に浮かんだのは、自分が二週間会社を休んでいる間に、精神に何らかの変調をきたしてしまって、入院させられたのではないかということだった。ここ数か月間、男の奇矯な言動がよりエスカレートしていたことを考えると、決して有り得ない話ではないと思われた。

——それとも……、母親の方が病気になったか、怪我をしてしまったのか？

男と一か月以上出会わなかった期間を考え合わせると、病気の母親の容態が深刻化して、身動きが取れないでいるのかとも思った。

五

日曜に早起きした直也は、いつもの朝のバス停に向かっ

た。

平日とは違って、休日の停留所に並ぶ人は誰もいなかった。男に倣っていつものように、自分の後ろにできるはずの行列の長さを想い、最後尾の辺りまで見渡した。余程その姿が奇妙に映ったのか、散歩途中の高齢の男が近づいて来て、案内表示板と直也の姿を交互に見ながら、もの言いたげな表情を残して離れていった。

――平日に現れないのなら、休日に出会えるかもしれない……。

根拠がなく、可能性は十に一つもないことは頭では分かっていたつもりだったが、心の中では一縷の望みをかけて待ってみた。

男の現れる気配がないと諦めた直也は、以前男が道草を食いながら歩いて行った道筋をなぞるようにしてたどっていった。男がとりわけ長く道草を食っていたT字路に差しかかると、掘割のせせらぎが聞こえてきた。直也は、男が立ち止まって流れに見入っていた一角に立った。清く澄んだ浅い水底一面に、梅花藻がゆらゆらと濃い緑尾を揺らして流れていた。水が温む季節になれば、鯉や小魚が群れをなして泳いでいるのだろうが、今は梅花藻だけが、薄ら氷を透かしたような弱い日差しを受けてたゆたっていた。

あの男は、バス停の行き帰りにいつもここで立ち止まり、時間がたつのも忘れて梅花藻の揺らぐ姿や、水中に咲く可憐な白い花に見入っていたのだろう。直也は、その時の男の心中まで推し量れる気持ちになっていた。

椎の木が見える路地を曲がった時、直也はわが目を疑った。思いも寄らない惨状が眼前に広がっていた。屋敷の中はどこもかしこも焦土と化している。傾いた板塀とヒバの垣根は跡形もなく燃え尽きて、かつての面影すら消え失せていた。奇跡的に焼け残った屋根の一部も、そしてそれを支えていた数本の太い柱も、いつ崩れ落ちるか分からないほどに真っ黒に焦げてかろうじて立っていた。傍らの物置小屋も屋根のトタンがひしゃげてしまっていて、家屋敷を守るようにそびえていた椎の大木は、猛炎に巻かれたのか幹も枝葉も炭化したように黒ずんでいた。

――サイレンを聞いたあの夜の火事は、ここだったんだ。

呆然とつぶやいた直也の頭に、男の顔と高齢の女性が浮かんだ。

――あの母子はどうなったのか？　無事に逃げおおせたのか？　それとも焼け死んでしまったのか？

直也は、近辺を歩いて火事の事情を知る人を探した。焼け跡から数件離れた敷地に、かなりの樹高の栗の木があって、その下の堆肥を積んだ畑に動く人影があった。声をかけてみたが、耳が遠いらしく、反応がなかった。二度三度と声を高くして呼びかけると、ようやく直也に気づいた。

鍬を握る手を休めて訝しげに見る老人に、直也は知人を装って火事の模様をたずねた。警戒心を解いた老人は、「ああ……」と溜息をもらしておもむろに燃えた屋敷を振り向いた。

「大変な火事だったんだよ。空気が乾燥していた上に風も強かったために、火の回りが早くてあっという間に全焼してしまった。よく一軒だけで収まったもんだ」

「みんな無事だったんですか」

「それがなぁ……、あの家には病気の母親と障害のある息子が暮らしていたんだが、二人ともいまだに消息不明なんだよ」

老人は、眉間に寄るしわを一層深くして、語を継いだ。

「普段は火の気のない物置小屋から火が回ったということなんだがなぁ……。最近、この辺りはボヤ騒ぎが何件かあって用心はしていたんだが、本当に物騒なこった」

直也の耳には、老人の言い回しが、不審火の可能性をほのめかしているようにも聞こえた。失火なのか、それとも放火なのか。もしも放火が事実であるとするならば、火をつけたのはいったい誰なのか？

堂々巡りの果てに行きついた先は、夢の中の男が暁子伯母を見て発した言葉だった。

「火を付けたのは、暁子だぞ。ほら見てみろよ」

男が指さした空が、ぼおっと深紅に染まっている。俺の後についてこいと言った男の影がみるみる小さくなる。直也も後を追おうとするが、足が地面に吸いついてしまって自由にならない。突然、背後から「ナオちゃん、つかまえたァ！」とかん高い声が上がったかと思うと、右腕に鋭い痛みが走った。驚いて振り返ると、学生服姿の暁子伯母が嬉々として両手で直也の腕をつかんでいた。とっさに振りほどこうとしたが、女のものとは思えない力でぐいぐい締めてくる。

「私がもっとナオちゃんをしっかりつかまえていれば、あんなことにはならなかったんだ。伯母ちゃんが悪かったんだ。もう絶対離さないから許してちょうだいね」

「あんなこと？」

直也は上の空で聞き返す。

「ナオちゃんがこの家に火を付けたことだよ」

直也の右腕を締め上げて離そうとしない。その手が燃え上がり、石膏色の肌に紅炎の光を受けて照り輝いていた。

「離してくれーッ！」

闇に叫んだ自分の声で目が覚めた。一瞬、自分がまだ夢の中にいるような錯覚に襲われて惑乱に陥った。正気に戻った直也は、深く息をついて額に噴き出た汗を手でぬぐった。夢を見て魘されていたのだろう、体中びっしょり

汗をかいていた。翌日も夢に伯母の白い手を見た。直也は夢を恐れた。終日体を酷使し夜はぎりぎりまで起きて、睡眠時間を可能な限り削った。

連日のように寝不足の朝を迎えても、依然として薄暗い部屋の中で目覚まし時計が鳴る前にきっかり目を覚ます生活は変わらなかった。そして定刻に遅れることなくバス停に並んでバスを待った。

しかし、意識が比較的明瞭なのはその辺りまでで、バスの乗客の一人となった後は、放心の態で日を送った。仕事が滞りミスも重なって、その事後処理に追われ残業になる夜が続いた。会社にも同僚にも多大な迷惑をかけ、窮地に追い込まれた直也は、その日も単純なミスを犯して、皆の前で上司から叱責され残業を命じられた。どうにかこうにか仕事に片をつけ、最終便のバスに走ってやっと乗り込んだ。座席に疲労困憊の身を預けて安堵の溜め息をつくと、二駅も過ぎないうちに正体もなく眠り込んで、降りる停留所を乗り過ごしてしまった。慌てて降車ボタンを押し、停まった所で降りたが、一転見慣れない夜景に取り囲まれて、方向感覚が危うくなった。とにかく戻るしかないと、頼りのない足取りで引き返した。

この辺りは、旧市街地から新興住宅地へとつながる道路の、いわば緩衝地帯とでも言うべき所だった。スーパーマーケットやファミリーレストランの並びが尽きると、次第に闇が濃くなって、間遠にともる街灯の光を透かして銀杏並木の影を落とす歩道が真っ直ぐ続いていた。

なぜこんな夜に、なぜこんなうら寂しい道を歩かなければならないのか分からなかった。

ふと直也は、背中に貼り付く視線を覚えて反射的に振り向いた。闇に目を凝らしてみたが、動く人影らしいものはどこにも見当たらなかった。訝しい思いが消えないまま再び歩き出すと、今度は、ひたひたと自分の後を追う足音が聞こえて来る。これも空耳なのかと疑ったが、こちらが歩を早めると向こうも早足になり、歩を緩めると同じように遅くなる。それならと、意表をついて足を止めると、すでにこちらの心を読んでいるのか、ピタリと足音がやむ。あくまでも、直也の歩調に合わせるようにして、付かず離れず後をついて来る。

全神経を背中に集中して、闇の追従者の正体を探ろうとしていた直也は、思わず息をのんだ。

——ああ、あの足音は間違いなく消えた男のものだ。そういうことか？　この前俺が後をつけたのを知っていて、今度は俺の居所を探ろうとしてついて来るんだ。

直也に感づかれたのを察知したのか、急に男の足取りが早くなり、みるみる間隔を狭めて近づいて来るのが、荒い息遣いではっきりと分かった。闇の中にあの手が伸びて来て、今にもいきなりつかみかかられる恐怖に耐えかねね、声

にならない叫び声を上げて後ろを振り返った。しかし、男の姿はどこにもなかった。

怖気を震った直也の目に、ポッ、ポッ、ポッと橙色の炎が後から後から現れて揺らめき出す。横並びになって一斉に明滅を繰り返しながら移動していったかと思うと、今度は円陣を組むように輪になってゆっくりと回り始める。寄せては返す波さながらに、炎の輪は大きく膨れ上がったり小さくすぼまったりしてすぐまた闇の中にのみ込まれていく。

——炎の舞いか……。

「キツネビが遠くに見えていても、そんな時には、火は見ている人間の隣で燃えているんだ。ほら、隣を見てみろよ」

男があごをしゃくって示すと、カチリ、カチリと音を立てた。いつの間にか、数珠つなぎになった無数の炎が直也を取り巻いてぼうぼうと燃え盛っていた。眼前の火の群れは、遠くで舞っている奔放な炎の動きとは明らかに違って、燃えたぎる火勢のはけ口を求めて狂おしく身もだえし、苦悶の唸りを上げていた。

「さあ、解き放つんだ」

呪文のような男の声が全身を貫いた。鼓舞された直也の足が地面を蹴り上げた途端、おびただしい火花が勢いよく弾け散った。紅蓮の炎は、四方の夜空を真っ赤に染め抜いてどこまでも燃え広がっていく。

赤く燃える直也の顔を見た叔母が、喜びの声を上げる。

「ナオちゃん、つかまえたァ！」

伯母は歓喜に泣き、目から溢れる涙の滴の一つ一つに揺れる炎が映っている。いつの間にか、二人の中から立ち上がる貪婪な炎の舌が絡まり合っていた。

突然、猛火に包まれた屋根が轟音を上げて崩れ落ちた。おびただしい火の粉が飛び散って、二人の体に容赦なく降りかかる。直也の眼の前で火だるまになった白髪頭の暁子伯母が、仁王立ちになり、直也を抱擁しようとする。身にまとった学生服が燃え上がり中から経帷子が現れるや、瞬く間に炎に飲まれ骨と化していく。

渡辺光昭
わたなべ　みつあき
1949　宮城県生まれ
宮城教育大学教育学部卒業
東北学院榴ケ岡高等学校国語教諭
「仙台文学」同人
宮城県芸術協会会員
著書『いつか水色の橋を渡って』（近代文芸社）
『起こすか？　戻すか？』（文芸社）
『停留所』（編集工房）

仙台文学

宮城県

高レベルの文章家集団

創刊は昭和三九年（１９６４）一月五日。東京オリンピックの年。同人一三名。７８ページ。主宰は工藤幸一（筆名・久東鉱一）で、当時新聞社「河北新報」の工務局長だった。当時仙台市内には一〇余種の同人誌があったが、「河北新報」は〝こんど百万の文化都市にふさわしい純粋な文学雑誌を〟というので創刊されたと紹介している。主宰者の工藤幸一は67号まで主宰して死去。享年八七歳。その後を継いだ牛島富美二（ごとうふみじ）が68号を「工藤幸一追悼号」として発行、その表紙裏に工藤の七五調を基調にした「仙台文学とは」を記しているので、掲載する。なお、工藤は創刊号の編集後記で「わたしたちは旗幟（きし）鮮明な主義主張を用意しているわけではない」と記している。

この創刊号が当時の文評論家小松伸六に全国紙で取り上げられ、高い評価を受けた一方、大江健三郎のような才能は見い出せなかった、と評価された。*

「仙台文学とは」
新鮮にして　重厚に
美しくして　妥協せず
花と小鳥と人間を
真実性を　味方にし
オリジナリティ磨くだけ
そして書くだけ　作るだけ
それが仙台文学
作品本位の　同人制
みな同格の結びつき
地方に深く　根をおろし
見果てぬ文学　追いながら
きょう一日を磨くだけ
そして書くだけ　作るだけ
それが仙台文学

９号（１９６６・11・20）の秋山篤（恵三）「化石の見える崖」、34号（１９８４・７・10）佐々木邦子「執行猶予」が芥川賞候補になった。但し、佐々木邦子の「執行猶予」は「卵」と改題されて中央公論に応募、中央公論新人賞を受賞した作品が候補になったものである。秋山（８号～27号まで同人）も佐々木（31号～88号まで同人）も他界している。

なお、工藤幸一は詩人・歌人としても高名で、日本詩人クラブ会員、現代歌人協会会員、歌誌「橄欖」の運営委員・選者も務め、「北東風」短歌社の主宰でもあった。工藤の故郷の山には、歌碑が建っている。詩集に「無人駅」他、歌論に「吉植庄亮」他、歌集に「観自在」他がある。また、新聞社「河北新報」は開発局長の役職で定年を迎え、仙台の大相撲准場所開催に尽力している。ただ工藤は片足が不自由で（少年時代遊び仲間達に崖から突き落とされたらしい）、杖が手放せなかった。毎号の合評会は某寿司屋の二階を利用していたが、酒を飲んだ後で二階から下りるのに苦労しており、しばしば手を貸したことを思い出す。酒好きで、唄好きでもある工藤は、当時はカラオケもなく、地声で童謡などを唄っていたものである。

「仙台文学」創刊当初は、同人の中に発行費を一人で負担する某会社の役員がいて、他の同人たちはただ書いて発表するだけでよかったが、同人制の意義から遠慮してもらうことになった。また印刷所が同人たちの印刷資金を持ち逃げして、行方を晦（くら）まし、同人たちで印刷所へ押しかけた時には蛻（もぬけ）の殻だったこともあった。当初発行日は不定で、五月だったり、八月だったりしたが、現在は年二回発行なので、一月一〇日と七月一〇日に固定している。これも同人が高齢化しているためかもしれない。というのも、かつて齢若かった同人たちが五、六名集まり、発行回数を増やしてもらおうとか「仙台文学」分派をつくろうとかいう動きがあった。年二回の発行は、高齢化した同人にとって、考える時間・執筆時間も十分にあろう。

創刊から五七年、半世紀以上も続いている。現在97号を一月一〇日に発行、98号を発行準備中である。同人一二

主宰／牛島富美二

あなたも
文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立90年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会
〒102-8559
東京都千代田区紀尾井町　文藝春秋ビル新館5F
☎03-3265-9657　bungei@bungeika.or.jp
http://www.bungeika.or.jp/

名。一時は二〇名の同人（20号1973・2）の時期もあった。

「仙台文学」を絶やさないためにも同人、特に若者を募集しているが、なかなか参加してくれないのが大きな悩みである。当時二四歳で参加した牛島富美二はただ一人創刊以来の同人だが、他の同人の多くは他界しており、牛島も八〇歳を超えている。

このたび、全国同人雑誌優秀賞を受賞した「キツネビ」の作者渡辺光昭は68号からの同人で、ほぼ毎号創作を発表しており、「ゆうどうえんぼく」（72号・2008・5）で宮城県知事賞を受賞した実績を持つ。今後「仙台文学」の中心として活動することを期待している。

（主宰／牛島富美二）

「仙台文学」79号掲載の「黒い水」で第6回まほろば賞を受賞した故・佐々木邦子。東日本大震災の津波を素材にした小説である

＊「朝日新聞」は「なぜふえる同人誌（下）」欄で「『仙台文学』の創作が、こんどの創刊同人誌のなかでは、もっともすぐれていたが、私のねがう、天才的シロウトは発見できなかった。当然である。たとえば、大江健三郎のような天才的作家は、そうざらにはいるわけではない」と、小松伸六が評した。なんと大江に匹敵する作家が期待されていたのである……。

（「文芸思潮」46号／同人雑誌紹介「仙台文学」より）

仙台文学の会
〒981・3102
宮城県仙台市泉区向陽台四丁目三・二〇
牛島富美二方
☎022・372・7891

同人雑誌優秀作

中津川文芸 復刊第5号

夢の岸

鴨居 諒

それは不思議な光景だ。普通考えれば何の変哲もない風景なのだが、よく考えてみると不思議なのである。池の端に小さな船が引き揚げられている。そこは瀬尾が散歩するときには必ず通る場所で、家から歩いて十五分ほどの場所にある。瀬尾の家のある住宅地を抜けると小さな丘があり、そこを迂回するように足を進めるとその池を一望できる場所に出る。周囲は古くからの民家が多少はあるが、全体は田畑に囲まれ、樹の疎らな林が反対側に拡がっている。池は低地に向かって小さなダムのようにせきとめる土手があるので、それが昔からのため池だったことがわかる。池の水は淀んだ平凡な水色をしている。綺麗ではないが、特別汚れている感じはしない。丘を迂回する坂はゆるやかな勾配だが距離的にはやや長く、瀬尾はその池の見えるあたりでいつもひと息つくことにしている。

はじめはよくある風景だと思って何の不思議も感じなかったのである。池に舟。舟はよくボート遊びをする時見かけるあの二人乗りのものである。決して新しいものではなさそうだが、かといってそんなに古びてもいない。それが池の中の僅かに浅瀬を作っている小さな岸の狭い場所に半分ほどは水につかりながら、引き揚げられたかたちになっている。瀬尾が一番不思議に思ったのは、その池の大きさと、置いてある船の意味である。そこは公園ではなく、単に農耕地の中のため池で、それも今は使われている気配はない。瀬尾のいる場所からは池を含めて多少の風景の面白さはあるものの、池に船を浮かべても決して景観がいいとは思えない。おまけに池の大きさがそんなに大きくないのである。もし釣りをするにしても船を出す必要はなさそうである。池の中央に糸をたれるのはどの場所からも少し長めの棹さえあれば足りるほどなのだ。そこで釣りをする人は見たことがないし、それ以前に魚がいるとは聞いたことがない。ボート遊びをするという酔狂な人がいたとしても回りの風景が貧弱すぎる。何か特別な学術的調査でもあるのかと考えても、もしそうなら当然近在ですぐ話題になる筈だし、それ以前にかなり前から船の置かれている位置は瀬尾の見た限り殆ど変わりないのである。それなのに、そこに全く置き去りにされている感じはないのだ。誰が一体何のためにそこに船を持って来たのだろう。船が引き揚げられている狭い岸の回りは低木が生い繁り身の丈もある草叢もあって、周囲からはとてもそこには行けそうのない状態である。よく見ると、ボートにはついている筈のオールが船の中はおろか眼で追っても周辺の何処にも見あたらなかった。

瀬尾はその日も家族と夕食をともにしながら、頭の中ではそのボートのことを考えていた。あの船はきっと夜みんなが寝静まった頃何処かへ出掛けているに違いない。そして朝になるとまるで何事もなかったように、そしらぬ顔をして全く同じその場所に戻っている。そんな想像をした。

「ねえ、お母さん、あの人形見つかった!?」

朝から大騒ぎである。娘の静香は高校二年生。文化祭のクラスの演劇の小道具で必要となったらしい。脚本にも関わっており、劇の中では重要な役割を果たすものなので、少女の頃離さなかった自分の人形を使いたいという彼女なりの拘わりがあるらしい。主役ではないがドラマの展開上大事な役柄で、その配役を得るために彼女なりの努力はしたようである。ああいう押しの強いところは誰に似たのであろう。妻はどちらかと言えば控え目だし、静香の弟の乙彦はもっと控え目で瀬尾は親の眼でもう少し覇気がほしいと思うようなこともある。思いつくのは妹の幸枝だが、彼女は静香が小学校の低学年の時、親戚の大反対を押し切ってカナダ人と結婚、夫の仕事の都合で今はボストンにいる。まだ彼女が未婚の時、静香は幸枝によく遊んで貰ってはいたが、人の影響というものはよくわからない。そう言えば、この頃静香の言葉の使い方が幸枝に似てきた気もする。瀬尾は前日のこみ入った議題で長びいた会議の疲れもあって、もう少し寝ていたい気もしたが、時計は九時近くになっている。静香の勢いは乙彦にも飛び火していて、「そんなもん、俺が知るかよお」と言う声まで聞こえる。こちらまで

更に飛び火してくる前に瀬尾はおきることにした。

瀬尾が遅い朝の食事をする頃、もう静香はいなかった。演劇の練習があるということで出て行ったと妻は話した。

「困ったわねぇ」妻は真底困ったような顔をした。

その人形が瀬尾には記憶があった。まだ静香が小さい頃に買ったものだが、普通の人形より少し大きいもので、良い顔立ちをしていて着せられている服の布地も質のよいものであった。少し値段は高かったが、興味のあまりない瀬尾が惹かれたのは人形の持つ雰囲気が、ある意味大人びていたからである。大人のコレクターが集める数十万円もする人形の持つある種の生々しさを瀬尾は知っていたが、その人形はまだ子どもの範中のもので、そのわかりやすさに、ある意味好感を持ったと言える。妻とその時相談して買ったし、持った静香が特に気に入って、いつも何処へ行くにも持っていた人形だからよく覚えているのである。静香のこころが人形から卒業しても、処分するのははばかられ、家の中の物置になったひと部屋のタンスの上に長い間放ったままにあった筈である。瀬尾はその場所にも記憶があった。「あそこに置いてあったろう」瀬尾が言うと妻は応えた。「それがないのよ」妻も同じ記憶だった。瀬尾はこの土地に家を建て、越してきて二〇年経つがその間に引っ越しとか大きな移動は全くない。家の中のものは大体無精もあって余り動かしてはいないのである。あんなものを誰も持ってゆく筈がない。家族は四人しかいない。もし泥棒が知らぬ間に入ったとしても先ずお金を持ってゆくだろう。どこか不可解な気がした。誰も捨てたりはしないし、乙彦もそんなことで意地悪をする人間ではない。第一理由がない。庭の隅のプレハブの倉庫もざっとみたが見あたらない。何かの勘違いをしてるのだろうかと、妻と二人でお互いの記憶を点検してみたが、あんなに静香が大事にしていたものを勝手に処分する筈ないということでは一致している。では一体どこへ？

次の週の日曜は一家総出、乙彦までまきこんで久し振りに家族協力しての大捜索となった。家の中のありとあらゆるところ、押入れの奥、倉庫の中に収めているものを出してまで捜すことになった。しかし何処にも見あたらない。まるで神隠しにでもあったようである。こういう時瀬尾は言わなくても良いことをつい言ってしまう癖がある。

「静香があまり放っておくものだからきっとこの家に嫌気がさして出ていってしまったんだよ」

「お父さんって大嫌い！」

竹藪が少しずつだが大きく揺れ始めている。午前中に海のある隣の県に台風が上陸したということだ。午後にはこのあたりを通過することになるようである。日中だからまだいいと瀬尾は思った。夜中の台風を何回か経験したこと

があるが、あまり気持ちのよいものではない。今日は日曜だが乙彦も静香も外出を控え、自分の部屋に籠っている。それぞれ思い思いに過ごしていることだろう。乙彦は音楽が好きで様々なジャンルの曲を聞いているが、作曲の真似事のようなこともしているらしい。瀬尾は二階の自室を書斎のようにしているが、北に向いたガラス窓には、空地二、三戸分を隔てて、竹藪が全面に見えている。最近、瀬尾の知り合いの業者が、多少凹凸のあった土地を削りとり、更地にして宅地として売り出したのである。だから空地の正面の竹藪が瀬尾の部屋からはやや見下ろす形で手にとるように見ることができる。

みんなで昼の食事を済ませ、自分の部屋に戻ると正面の丈の高い竹藪はにわかに騒がしくなってきた。別の部屋の戸を軋ませる風の音も聞こえてくる。ああそろそろ始まったなと瀬尾は思った。午前中は時折強い風があってそれがぴたっとやむような一瞬があったが、段々ひっきりなしになり、それも徐々に強くなってきている。竹藪は幹も笹の葉もいっしょに大きく揺れ動くので、ある意味壮観である。まるで大きな拳が竹藪にえぐるように入ったかと思うとそれを押し返すような黒い強い力が見える。それらは絶えず複雑に動いて決してやむことがない。その複雑に吹いている恐ろしい風が竹藪を狂おしいくらいに翻弄しているわけだが、その奥行きの深さととてつもない揺れが見る者を震撼とさせる。見ているとこちらまで音叉（さ）のように共鳴して身体ごと揺れているようにも思え、軽い目暈（めまい）を感じた。

瀬尾は観察していた。竹藪を思うがままに揺らしている昏（くら）い大きな力を。風の力は一様ではなかった。分散させている力をある時は大きな拳のように一本に集中させ、藪を根こそぎ折るほどの力を見せ、別の時には横様に吹きつけて竹藪のたて髪を逆立てるような異様な吹きつけ方をした。そしてほんの稀にだが、まるで息をとめたように風のない不気味な一瞬もあった。しかしそれが済むとまたすさまじい竹藪の動きである。瀬尾は胸をときめかす子どものように軽い目暈（めまい）に快感を感じていたが、ある時からその動きが別の動きに見えはじめた。それまでは風の力にしか見えなかったが、よく見ると竹藪が凄しい力で自らを意識的にまるで狂人のように揺らせているように見えてきたのである。瀬尾は頭を振ってもう一度見直したが、やはりそのようにしかどうしても見えない。そのうちに竹藪のある部分が手のように長く伸びて、全体を揺らしながら、彼においでおいでをしているように見えてきた。

瀬尾は思わず目をそらせた。

庭の異変に瀬尾が気がついたのは、回りが暖かくなってすっかり春めいた頃である。先がけて山茱実や臘梅、水仙などはいつものように順番に咲いたのだが、庭の主役とな

る芍薬の約四〇本の様子が少し変なのである。その芍薬は祖母が田舎の実家で丹精して育てていた珍しい品種のもので、全てが咲くとそれは見事なものだった。淡いピンクの花片の上にフリルのようなクリーム色の花片が重なりその上にまた小さな薄紅の花片を持つ、園芸センターでも先ず見かけることのない花である。瀬尾は次男で、家を建てる時に、その家から丸ごと貰い受けてきたものである。兄である長男は家の後を継いではいるが、樹や花のことには全く興味がなく、面倒をみる手間が省けるから都合がよいと考えたらしく、全部持っていってくれという話になった。瀬尾もそれまではそんなに花に興味のある方ではなかったなかったものの、祖母の芍薬の美しさを認める気持ちは兄よりもはるかに強かった。瀬尾が家を建てる時、庭にあの花がいっぱい見られるのは悪くないと考えて、そのまま全部を譲り受けることになったのである。それ以来である。彼がその他の花にも広く興味を持つようになったのは。妻も花はもともと好きだったので、たまの日曜日には連れ立って園芸センターに行く機会も増えていた。だから庭は芍薬を中心にその回りはもちろん、別の場所にいろんな花が植えられている。

芍薬は移植した最初の頃は枯らしてはいけないと思い専門家に話を聞いたりして丁寧に世話をしていたせいか、実家にいる時より見事な花を咲かせているように見えた。それは七・八年続いただろう。ほうっておいても毎年肥料さえやれば美しい花を咲かせる。詳しい人に聞いて、時折、球根の植え換えもしていたのだが、忙しさもあってここ三、四年何の世話もしなかったので、気がついたら庭は大変な事になっている。おそらく買ってきた他の花の土にひそんでいたのだろう。スギナが恐しい勢いでいつの間にか庭全体にはびこっていた。ひとつの球根を掘り出してみるとその回りには息苦しいほどのスギナの根が絡(から)みついている。これは駄目だと思って、妻を誘って、他の根も全て取り出し、丁寧に取り除いて、また同じ地中の同じ場所に戻した。まる三日は掛かったであろう。

異変は芍薬が地中からあの紅い鮮やかな芽を出している時は気づかなかったのである。芽は小さいが非常に蠱惑的な色をしていてやがてつける花の見事な色を凝縮し予感させているような不思議な力を持っている。それを見てはじめはいつもと同じだと迂闊にも思っていたのである。ところが明らかに違うと思ったのはそれから約二週間後のことだった。もちろん芽の成長に遅速(ちそく)はあるのだが、芽から幹が立ちあがり葉をなしてゆく最初の一本が急に地面から七、八センチのところで中心部がチリチリと焼けこげたように枯れて、そこで成長を止めてしまうのである。全部枯れてしまうのではない。そこまでに出して来た葉は枯れずに青々としたまま、しかしそれ以上はまるで時間が止まったように成長をしないのである。

それから瀬尾は毎日のようにその様子を見ていたのだが、全てが最初のものと同じ様になるというわけではない。もっと早くに無惨に立ち枯れてしまうものもあれば、幹は先まで成長し葉もつけるが、やはりチリチリと焦(こ)げるように幹の先端を黒く失うものもある。稀に順調に生育していると思える葉も大きくつける芍薬もあるが、肝心な花を咲かせない。咲いてもとてつもなく貧弱な小花である。しかも、その全ての花が、葉の大小や数の差はあってもそれぞれに、息をとめているような感じでしかも生きているのである。一つの株はその株から数本の芽を出し幹を持って育ってゆく。その株から成長する幹の姿は背の高さも葉も様々で、それが四〇株もあるのだ。全てが枯れてしまえば廃墟という形容もあるだろうが、姿はどうあれ、それぞれは枯れることもなく成長を止めたまま生きているわけで、庭全体の様子は異容というほかなかった。

妻と移植をした時期が悪かったのだろうかと瀬尾は考えた。専門家に聞いたわけではなかった。その頃は割と暖かな日が続いていて考えてもみなかったが、本来芍薬の根が持っているリズムや時間を乱したのかもしれない、とも思ってみた。人間と同じように深く睡眠する微妙な処を不可抗力によっておこしてしまったような。こんなことも植物に詳しい人ならすぐに答えを出せてしまうことかもしれないが、それにしても瀬尾は思った。というのも、実はそんなこともあろうかと、全く手をつけず、掘らずにそのままにしておいた芍薬が二・三株あったからである。ところがそれも、同じ状況になっていたのである。その上更に不思議なのは、妻と芍薬を移植した時、別の色の種類も増やそうと考えて、新たに買って来て植えた芍薬も、全て同じ状態になってしまったことである。園芸センターで買ってきたものは七・八株あったであろう。丁度売り出しの時期でもあり、買ったのも一店ではないので、祖母の芍薬とそれらの花が同じ状態になるのはどう考えても合点がいかなかった。地中では一体何がおこっているのだろうか。瀬尾は怪訝な気持ちになった。まるで花達が瀬尾のした何かに腹を立て、しめしあわせて花を咲かせずにしているように思えて仕方がなかった。

瀬尾は今仕事の関係で知りあった友人と或る喫茶店にいる。通りに面した古い珈琲専門店で、焙煎をして豆も売っている店である。土曜の午後だが客はまばらで、室内にはコーヒーのかぐわしい香りが漂っている。通りに面した大きなガラス窓からは歩いている人々の様子が見える。街路樹があって緑は濃く、木洩れ陽が路に降って、そこを歩く若い男女も初夏の服装である。久しぶりに書店で出会った友人はちょっと聞いてほしいことがある、というのだ。時

間にも余裕があったので瀬尾は付き合うことにした。「他愛ないことだから、笑わんでくれ」と北村は前置きをして話しはじめた。

北村が園芸が興味だということを瀬尾はよく知っている。それどころかその凝り方は瀬尾の比ではない。北村の住んでいる旧家は祖父の代からの地主で家の敷地と同じくらいの面積の庭があり、その半分は様々の花の苑になっている。菊や牡丹や芍薬をはじめ、気に入ったものはハーブまでもと幅広い。仕事上での関係だが、菜園の話がきっかけで、丁度家を造る頃でもあったので、急速に親しくなったのだ。瀬尾は招待されて北村の庭を見せて貰ったこともあったし、幾度か一緒に駅前の酒場で飲んだこともある。瀬尾がより強く花に興味を持つようになったのは北村の影響も否定はできない。見せて貰った北村の庭園はもともとあった日本庭園を一部残して訪問した人が廻遊できるように改造したもので、自ら設計したものだった。よく手入れされていて、瀬尾は訪ねた時、これは自分では真似ができないと思ったものだった。常に園芸センターに通っていて新しい花にもめざとく、行く度に珍しい花を見せて貰った記憶がある。今度も仕入れた新種の花の報告かとも思ったが、どうもそうではなかった。もちろん久し振りのことなのでそういう話もあったのだが、話は家に祖父の時代からある椿のことである。その樹は瀬尾にも記憶がある。幹の太い姿の良い樹だが、如何かな、花付きがとても悪い。もう少し咲いてくれるといいのだが、と北村が不服を言っていたのを覚えている。しかしその時は椿の咲く時季ではなかったので瀬尾にはどれくらい花つきが悪いか見当がつかなかった。それがねえ、と声を低くして北村が言う。「去年からこれでもか、という程たくさんの花をつけるようになったんだ。」声の調子が少し高くなってきたような気がする。「自分でもあういうことはあるんだな、とびっくりしているんだけど……」

北村の話はこうである。一昨年また二回目の大きな庭の改造しようとしていた時、廻遊する道の配置上、例のその椿を伐ってしまおうかという話になったと言う。椿から約五メートル程の処で小さな岩を庭師と二人で道の脇に沿うように移動させている時である。決して大きな声ではないが、かといってヒソヒソ話のような小さい声ではない。「この椿は花つきが昔から悪くてねえ。」「じゃあ、いっそのこと、お酒を根元にあげて切ってしまいましょうか。」庭師とはそれだけの会話である。他にあれこれのやりとりがあったわけではない。結局考えたが北村は祖父の代からそこにあるもので、幹もかなり太くなっていたから流石に憚(はば)かられてその年は伐るのをやめることにしたらしい。北村にはそういう信心深いところがあるのである。ところが次の年になったら、今までは五つか六つくらいしか

なかった花が一遍にたくさんの花を急に咲かすようになったと言う。あれはきっと僕らの話を聞いていたに違いない、と北村は言うのだった。そのような話は本か人の話で瀬尾は聞いたことがあるように思った。しかし眼の前で同じ話をされると俄(にわか)には肯(うな)きがたい。だが北村の話はそれだけでは終わらない。まだ先がある。彼はその話をあまりに不思議なのでいささか興奮気味にいろんな所で話したらしい。大抵の人はふんふんと興味深そうに、また面白そうに聞いてくれたが、ある集まりでその話をしたら、変な空気になってみんなが怪訝そうに自分を見たと言うのだ。あとで北村はその微妙な反応をゆっくり考えて思いあたったのだが、その顔の中味は、そんなばかなことがこの世にある筈はない、オカルトでもあるまいし、この人、なんか変な新興宗教にでも入っているんじゃないか、と思われたのではないかと言うのだ。瀬尾はまさか、と否定したが、北村は、いやあの時の顔はそういう顔だったと確信を持って言う。せっかくマスターが煎(い)れてくれた熱いコーヒーは眼の前で既にさめかかっていた。

「ねえ、君なら信じてくれるよね」

その晩瀬尾は奇妙な夢を見た。

始業に遅れそうなので急いで小学校の門をくぐり教室に行ってみると、もうみんなは来ていて失踪した筈の母がいつの間にか戻って小学校の先生になっている。慌てて勉強道具を出し後ろの棚に鞄を入れようとすると、その上に例の人形が座っていた。ああこんな所にと思っていると「だから言ったでしょ」と言う声がする。振り返るとボストンにいる筈の幸枝がそこにいて、母は既に授業を終えて廊下へ出てゆくところだった。このままでは会えなくなると思って通路に出ると壁に幼ななじみの悦ちゃんの絵がかかっている。赤い太陽が出て山があってその前を丸っこい緑色の電車が走っている。懐かしいと思って隣の絵を見ると何が描いてあるのかよく分からない。何かどす黒いものが渦巻いているような感じで、よく見るとその中から二つの眼のようなものが現れた。瀬尾はこわくなって廊下を暗い方へ一目散に駆け出すと、そこは縁日で神社への参道にはたくさんの店が並んでいる。人は多いが顔は見えない。人ごみを夢中でかきわけているのに自分が一体何の為に何処に向かっているか分からなかった。人が途切れて縁日の端に『易』の看板が出ている。幕の隙間から誰かが占って貰っているのが見えた。覗き見をしてみるとどうやら後ろ姿は妻の背中で、うんうんと深く肯いている感じだ。占っている老婆にはどこか見覚えがあったが、思い出せない。何を占ってもらっているんだと声をかけようとするが声が出ない。しかし内容はどうやら自分の未来のような気もする。何故か気落ちして先に進むと神社の境内でよっちゃんが駒

回しをしている。そうだヨッちゃんは駒が上手かった。自分も入れて、と回し始めると、父親がいつの間にか後ろに立っていて、早く家に帰りなさい、と言った。天の奥から降ってくるような声だった。家のドアを開けるとそこは向日葵畑で自分より背の高い花があちらこちらを向いて立っている。畑の真中に自分によく似た男がいて、ここから先は入ってはいけないと言う。男の肩越しに土を掘っている数人の男の姿が見えた。見知らぬ男たちだが何やら必死な様子だけは伝わってきた。よく見ると墓でも掘るような大きな穴である。僕の畑に何をするんですか、とこみあげてくるものがあったが、男は人差し指を口にあて、静かに、という仕草をして切符を差し出した。それは見たことのないもので、裏を確かめようとすると、てのひらの中で消えた。軽いめまいがして目をつむるといつの間にか瀬尾はボートに乗っている。広さからいって湖のようだ。ボートの中の向かい側には昔恋人だった美奈子が赤ちゃんを抱いて乗っている。白い服をきて笑顔も昔のままだ。かわいい子なので、誰の子?と聞いてみると、何言ってるのよと怒った顔をして「あなたの子よ」と言う。名前は、と聞くと曜という。字は聞かなくても分かった。変な名だなと思うと美奈子は「あなたがつけたでしょ」と言ったが、今度は困ったものだという顔をして子どもをあやしている。見回すと船は水郷を音もなくすすんでいて、右手の対岸に連翹の黄が鮮やかで、それが水に映っている。その隣にある建物は、見あげると、とてつもなく高い塔で、その上の窓で人が手を振っているのが見えた。誰かわからないほどの高さである。目を移すとボートの中にはもう誰もいない。何か手紙のようなものがおいてあるが、瀬尾はその内容をあらかじめ知っていたような気がした。気がつくと船はすべるように河とも湖とも海とも言えない白い平面の上をおそろしい早さで走りはじめている。しかし危険な感じはどこにもない。見渡すと東の空らしいところにほんのり明るい部分がある。夜明けのようだが、その頃には自分の体もなくなって、まるでそのまま舟にでもなったような気分で、何処かに向かってひたすらにすべってゆく。

鴨居　諒　かもい　りょう

1949年生まれ
同人誌「中津川文芸」主宰
短歌誌「彩雲」代表
歌集「アルカディアの碧空」「冬陽坂」「山峡―田中冷灰子全歌集」「風をかたちに」随筆集「風花」
画集「時空万華鏡」
ギャラリー「詩と美術館」経営（現在休業中）

新刊

文豪の遺言

木内是壽

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最期の言葉――それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

坪内逍遥　尾崎紅葉　樋口一葉　森鷗外　田山花袋　泉鏡花
国木田独歩　夏目漱石　島崎藤村　芥川龍之介　永井荷風
谷崎潤一郎　志賀直哉　有島武郎　武者小路実篤　菊池寛
宮沢賢治　川端康成　小林多喜二　大佛次郎　岡本かの子
吉川英治　太宰治　井上靖　三島由紀夫　松本清張　遠藤周作
吉行淳之介　司馬遼太郎　寺山修司　向田邦子　中上健次　他

アジア文化社

2017.9.1 出版

1728円（税込）送料サービス

御注文は裏面を御覧下さい

作家の遺言は、死に臨んで純粋に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

1728円（税込・送料サービス）アジア文化社まで

中津川文芸　岐阜県

文学への消えない焔

幅広い芸術精神

私が第一歌集を出した時、たくさんの礼状が来たが、北海道の友人の返信の中に『江別文学』という同人誌が入っていた。その瀟洒な表紙とゆたかな内容を見て、私には俄かに甦ってくるものがあった。その不思議な高揚のまま、昔の同人達に声を掛けた処、意外に多くの同人の賛同があり、新しい人も加えての改めての出発となった。原稿も思いがけない集まりの良さで、ページ数も当初の予定の三倍の二〇八頁という大冊。小説七編を巻頭に、エッセイ八編、詩、翻訳詩、短歌、戯曲と、同人八名には「私の好きな場所」という特集テーマで自由に執筆して貰い、地元の歴史、中津川の俳句の変遷や「和宮降嫁」の時の資料考察まで含む、少し欲張った実に四〇年振りの復刊第五号となった。四百部刷ったのだが本誌を読んで面白がって応援してくれる人も、元気が出ると言ってくれた人もいた。街の書店におそるおそる置かせて貰った処、私の想像以上に売れているようで、こんな時代に、一冊の同人誌に千円はたいて買ってくれる人がいることに奇妙なしかしとても嬉しい感動を覚えている。

40年振りの復刊

「中津川文芸」を私が創刊したのは一九七七年春、私はまだ二〇代後半でこの頃のことを思い出すと今でも自分で自分がこそばゆい。独身で結婚のことなど全く考えてもいなかった。そのくせ女の人はけっこう好きだったけれど。同人は十五人。それでも当時の印刷費は大変高かったので、皆と話して広告をとることにした。中津川市の商店、書店、飲食店、旅館、それに会社の約五〇軒。今から考えると一万か二万円のお金を広告にもならない広告に、よく気前よく出してくれたものだと思う。振り返って考えるに、そのことをその時代の良さやこの地域の文化を物語っていると指摘する人もいる。

内容を見ると、小説、詩、短歌、随筆、紀行、評論、研究と、その頃から既に総合文芸誌のようなものを目指して

40年ぶり！待望の復刊

総合文芸誌「中津川文芸」

総合文芸誌「中津川文芸」（A5判、20頁）が、40年ぶりに復刊しました＝写真。

同誌は1977年春、彩雲短歌会主宰で、当時高校教諭だった田中伸治さん（70）＝中津川市手賀野＝が発行人となり、同じく高校教諭の平林政義さん（72）、市職員の遠山義樹さん（75）ら文芸仲間に呼び掛けて創刊。

同年秋に第2号、翌年夏に第3号、80年秋に第4号を発行しましたが、その後、田中さんが仕事の関係で多忙になり、長く休刊していました。

しかし、今年、以前から同人誌を発行していた北海道の知人が現在も継続していることを知って触発され、復刊を企画。創刊時の同人に加え、劇車銀河鐵道主宰のいちかわあつきさん（60）や長多喜代表の吉田信助さん（68）らに呼び掛けたところ、県内外の13人が賛同。うち3人は30代です。

内容は、小説をはじめ短歌、エッセー、詩、地元の歴史や戯曲、訳詩から書籍・映画・音楽・絵画評論に至るまで多彩で、特集「私の好きな場所」には8人が寄稿。330部刊行し、矢野書店（本町）で頒布（1000円）しています。

田中さんは「応援してくださる方が思い外多く、年2回のペースで発行する予定。幅広い年齢層の方が文芸に興味を持ち、参加していただくきっかけになれば」と呼び掛けています。問い合わせは☎090（6073）0552田中さん。

いたことがわかる。

同人は皆大変仲が良く、一年に一冊のペースでも、事ある毎に集まっては駅前の飲み屋で冗談交えて時に真剣に文学論などもやっていた。第四号を無理矢理出したのは、私の名古屋への転勤で継続が困難になったのだが、〈三号雑誌〉と言われるのが嫌だったからである。

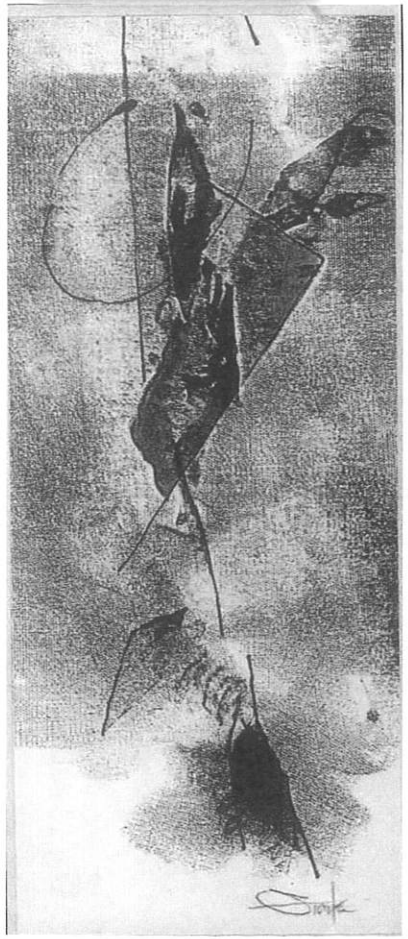
その後名古屋では、第二一回芥川賞・小谷剛さんの『作家』に出入りし、前後して今も続いている『北斗』の木全円寿さんと知り合った。木全さんは幾度もお宅に伺い、親しくお付き合いさせて頂き、小谷さんからは様々の執筆上のアドバイスを貰ったりした。御二人から受けた影響は私の中に少なからずある。特に木全さんの「真に文学をやることは有名になることではない」という言葉は印象深く、今も真摯に受けとめている。木全さん亡き後は、その頃の私の同僚で小説を書く吉田栄治が暫くの間代表をしていたと思う。その頃のことを思うととても懐かしい。

私には昔から妙な性癖がある。職場でもサークルでもそこに入ると自分でも意識しないうちに皆を巻き込んで同人誌を作ってしまう癖である。それもけっこうな規模、多い時は三〇人位。然しよろしくないのはそれを途中で潰してしまうこと。潰すと言っても仲間割れとか諍いではない。言わば私がそこにいなくなることによる自然消滅である。その意味ではある種お尋ね者と言えるかもしれない。この際ここで今までどこにも書いたことがない、関わった同人誌を全て神妙に白状しておこう。大学時代の『軌跡』に始まり、『中津川文芸』『夜の太鼓』『シフレ』、短歌では『榛（はん）の木』短歌誌『彩雲』、直前まで行って実際の発行まで及ばなかったものに、短歌では『瑠璃』、同人誌では『空中庭園』がある。大方は休刊だが、この内手堅く続いているのは短歌誌『彩雲』でこちらは十五年、健全な運営で現在五十七号。ピーク時には同人が百二十五名いた。

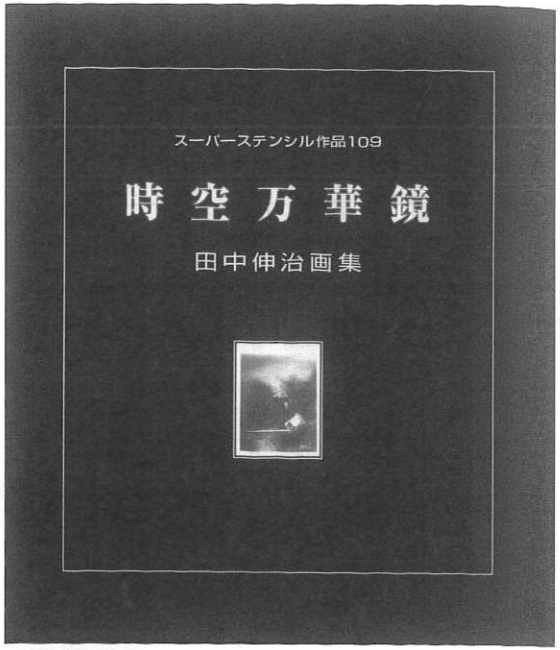
今度の『中津川文芸』の復刊はその意味で罪滅ぼしのようなところがなくはない。楽しく行けるところまで自然体で行こうと皆と話している。

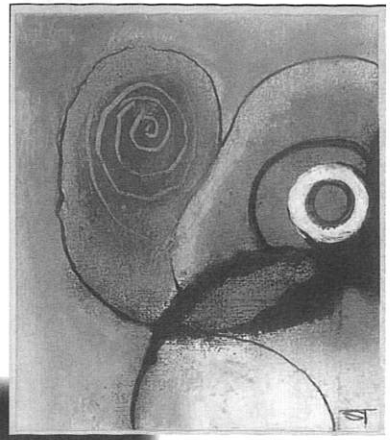
現在同人は十三人。小説を書く平林政義は創刊の頃私と同じ国語の教員。遠山義樹は当時中津川市立図書館館長で郷土資料に詳しい。新しく加わったいちかわあつきは俳優で脚本も詩も書き朗読もやる。今号には戯曲を載せた。田中秋生は大学図書館に勤め地道に丹念に小説を書き続けてきた。老舗旅館の代表吉田信助は歴史に深い興味があり、同人誌『中津川界隈』を出していた。森川龍志は詩集を既に三冊出して仏文学を研究、今回はジュリアン・グラックの詩の翻訳に挑戦した。他に登山を得意とする後藤卓治や木澤敏夫も参加。編集を担当し南米文学研究と小説も書く山口透は三〇代前半。「極楽の淵」の吉田恵理莱、短歌六〇首の七海ゆきの二人はもっと若い。頼もしい限りである。次の第六号の特集は二つ、「高浜虚子と中津川」「出会い・本と私」である。現在準備中。

（仕掛人／田中伸治）



「ラジオゾンデ」
（画集「時空万華鏡」より）





「ヒエロニムスの卵」

中津川文芸
中津川文芸創作サークル
〒508-0015
岐阜県中津川市手賀野 41-1
TEL 0573-65-3722
090-6073-0552
仕掛人　田中伸治